烈祖成績　五

烈祖成績巻之五

天正十一年（一五八三）
至　十七年（一五八九）

天正十一年癸未正月朔、参河・遠江・駿河・甲斐・信濃五州の士浜松城に登り、神祖及び世子長麻呂に謁し新正を賀す。按ずるに、台徳公、世子と為る、諸書年月無し。蓋し此前に在り。説慶長五年に見ゆ。又按ずるに、諸書皆秀忠公と書く。而るに秀の字、豊臣秀吉公授くる所なり。下文十八年に在り。諸書之を追称するなり。今其実に従ふ

十六日、神祖岡崎に如（ゆ）く。

十八日、織田信雄岡崎に来る。神祖に謁し事を談ず。人其故を知る莫（な）し。

二十日、神祖吉良に狩す。

閏月朔、浜松城に還る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事　松平康親頻年三枚橋城に在り。

善く小田原の兵を拒（ふせ）ぐ。

二月十二日、神祖其功を賞し康親に書を賜ひ駿州河東二郡の地を加へ給ふ。

二十日、柴田康忠甲州兵を率ゐ信州佐久郡に出で小室・巌尾二城を攻む。依田信蕃佗（＝他）兵を仮らず（借らず）己の兵を以て巌尾城を取らんと欲し、弟加賀守信幸・善九郎信春と急進し之を攻む。家忠日記・松栄紀事○上文十年十月二書並書。神祖賜書信蕃及弟新九郎。源八郎而無名至此。書信幸・信春。蓋加賀守即新九郎。善九郎即源八郎。而改其称乎。未詳 城陥つると雖へども信蕃兄弟三人皆銃矢に中（あた）りて死す。城主巌尾小二郎京師に奔る。神祖、信蕃の戦死を惜しみ長子源十郎・次子新六郎を召し松平氏を賜ひ、源十郎に諱字を授け松平修理亮康國と称す 拠雑録、依田肥前守信守所書家系叙爵賜諱字在十五年。蓋諸書追書之也。今従之

三月、神祖大久保忠世をして信州に赴かしむ。康國尚ほ幼し。故に忠世を遣はし之を経略せしむ。忠世、康國と小室城を攻め之を抜く。城主大道寺駿河守政繁敗走す。 諸書無駿河守之名。今拠家忠日記。十八年攻小田原城。文書之 上杉景勝川中島を守る。月を踰（こ）え出兵する能はず。佐久郡悉く平ぐ。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事○松栄紀事上文云、柴

田康忠攻上杉景勝部下小室巌尾二城。按ずるに、大道寺駿河守、北條氏の重臣にして景勝の将に非ず。蓋し、北條氏直、駿河守をして之を取らしむるなり。故に今闕疑し、景勝の部下と書かず。紀事又云はく、忠世、佐久郡に入る。景勝の兵高坂弾正奮戦すと雖へども利あらずと。按ずるに、弾正虎綱長子源五郎の長篠に戦死し、虎綱死し、武田勝頼、源五郎の弟を以て源五郎を襲称し部曲を統領せしむ。勝頼滅後景勝に降りて弾正と改称するか。然るに明拠無し。故に取らず

是役や、小幡昌忠・和久頼氏・河窪信俊、巌尾前山に戦ひ、大久保忠教田口に戦ひ、各首級を獲る。杉原大和守直明佐久郡に戦ひ功有り。三枝土佐守昌善相木砦を攻め之を抜く。　松栄紀事

十四日、屋代左衛門勝永　後為越中守　酒井忠次に就き麾下に属さんことを請ふ。神祖屢（しばしば）書を賜ひ、以て之を奨諭し信州更級郡を授く。

二十八日、諏訪郡を諏訪頼忠に賜ふ。

四月二十一日、羽柴秀吉、柴田勝家と江州志津嶽柳瀬に戦ひ大いに之を敗る。勝家越前北荘城に奔還す。

二十四日、勝家自殺す。年譜・創業記・家忠日記・秀吉譜・松栄紀事　神祖小栗又六を以て使と為し、秀吉を労(ねぎら)ひ問はしむ。松栄紀事　織田信孝、勝家に党し岐阜城に在り。秀吉兵を移し之を囲む。織田信雄、信孝を誘ひ城を出で智多内海に至り自殺す。創業記・秀吉譜・年譜附尾

二十八日、神祖甲州に如く。小笠原貞慶・諏訪頼忠・真田昌幸・保科正直来謁す。創業記、本書云、貞慶去年謀叛至此帰款。按ずるに、貞慶或は叛し、或は服す。説十三年に在り

五月十日、神祖甲州より至る　松栄紀事曰、神祖将兵至江州聞勝家敗死還浜松。按ずるに、秀吉公、勝家を攻むるに兵力余り有り。未だ嘗て神祖に援を乞はず。蓋し、誤りて甲州を以て江州と為す。故に従ひて其説を為すなり。今従年譜・創業記・家忠日記

二十一日、石川数正を以て使と為し初花の小壷を羽柴秀吉に贈る。年譜・家忠日記・松栄紀事

是日、左近衛少将羽柴秀吉参議と為(な)り、従四位下に叙せらる。摂州大阪城を修築

し徙居（しきょ）す。公卿補任・家忠日記・秀吉譜・松栄紀事

七月、神祖の第二女、北條氏直に嫁す。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事○拠源流綜貫、氏直卒、夫人再醮池田輝政、生数子。輝政卒為尼、号良照院　酒井忠次小田原に送至す。矢部四郎右衛門・鵜殿大隅守滕（よう）（付添）を為す。氏直一文字刀貞宗の短刀を忠次に贈る。

八月六日、羽柴秀吉、津田左馬允を以て使と為し、不動国行の刀を神祖に贈る。

二十四日、神祖甲州に如き国中法令を定む。

是月、信州上田城を真田昌幸に賜ふ。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

九月十三日、神祖第（五カ）土子萬千代麻呂浜松城に生まる。長じて信吉と名のり、出で故穴山梅雪家を継ぎ武田五郎と称す。徳川家譜・源流綜貫

十月五日、神祖正四位下に叙せらる。

七日、左近衛権中将と為る。年譜・創業記・公卿補任・家忠日記

十一月十五日、甲府より還り駿府城に至る。

十二月四日、浜松に還る。年譜・創業記・家忠日記

是歳、駿州長窪の故墨を修し稲垣長茂をして之を戍らしむ。家忠日記　江尻城を天野康景に賜ふ。松栄紀事・○本書曰、是歳、高木九助廣正致仕。賜其子甚左衛門正綱家督領歩卒五十人。戍武州忍城。按ずるに、是時忍城、北條氏政管内に在り。伊豆相模を越し之を戍るべからず。故に今闕疑あり。書かず

十二年甲申二月二十七日、神祖従三位に叙せられ参議と為る。年譜・創業記・公卿補任・家忠日記・松栄紀事　羽柴秀吉大坂城に在り。威名日に盛んなり。織田信雄其彊梁（強く盛ん）を忿（いか）り漸く（しだいに）猜隙を生ず。信雄の将松島城主津川玄蕃允近治　斯波治部大輔義良子・星崎城主岡田長門守・刈安賀城主浅井田宮麻呂、素（もと）勇名有り。秀吉之を離間せしめんと欲し其勇敢を称へ之を厚遇す。諸書但云、秀吉称其勇厚遇之。而無離間字。按ずるに、秀吉公三将を厚遇するは信雄をして之を疑はしめ以て兵端と為さんと欲するなり。此れ其木（本）の謀なり。今逆意之を書く　信雄の侍臣之を讒す。信雄呆（果）たして三将の貳（ふたごころ）有るを疑ひ秀吉と絶たんと欲す。神祖、信長の旧好を忘れず、善く信雄を遇す。其の秀吉と隙有るを聞き酒

井重忠を清洲城に遣はし、以て通謀せしむ。秀吉、近治・長門守・田宮麻呂及び滝川三郎兵衛勝雅を大阪城に召す。勝雅初為僧、号源洋院。養髪称滝川三郎兵衛。後事秀吉公―有寵。賜氏称羽柴下総守。為勢州神戸城主。按ずるに、伊勢国司軍記、勝雅、雄親と作す。松栄紀事雄利と作す。今秀吉譜に従ふ 接遇款曲（手をつくしてうちとける）たり。信雄と嫌隙無きを諭す。三将悦び尾州に帰り信雄に告げんと欲し尼崎に赴く。勝雅独り伊賀路に由り使を清洲に遣はし三将秀吉に阿党たりて密謀有りと讒す。信雄之を信ず。

三月三日、近治・長門守・田宮麻呂を長島城に召し之を殺す。年譜・創業記・家忠日記・秀吉譜・徳川歴代・松栄紀事 長門守の弟勝五郎変を聞き 松栄紀事、勝五郎作将監。蓋改称也。太閤記・家忠日記曰、勝五郎後称伊勢守 家臣天野五右衛門・阪井下総・―赤川總左衛門・須賀太左衛門等と星崎城に拠り反す。

六日、信雄刈屋城主水野忠重・勝成父子をして之を囲ましむ。城兵拒守す。忠重父子力戦し之を攻む。火を天野五右衛門守る所の城下の営に縱（はな）ち之を焼く。城兵

開門し出で戦ふ。忠重の兵鈴木與八郎突き須賀太左衛門を傷せしめ之を橋下に擠(おと)す。勝成進み五右衛門の墨に入る。城兵箭を放ち石を飛ばし之を捍(ふせ)ぐ。勝成の兵巖村作右衛門箭に中り死す。其の余の死傷頗る多し。城兵利有りと雖へども、援軍無きを懼れ城を致して去る。忠重父子右余(うよ)の部城を攻め之を抜き、神祖及び信雄に報捷(けん)す（報告する）。家忠日記・松栄紀事　信雄既に三将を殺し遂に秀吉と絶つ。起兵し之を討たんと謀り使を濱松に遣はし援を乞ふ。神祖之に応ふ。信雄、又援を池田勝入・森長可に乞ふ。秀吉亦使を勝入に遣はし重き利を啗はせ以て之を誘ふ。勝入之に従ふ。長可は其女壻なり。故に亦之に従ふ。民間流言し、北條氏直隙を伺ひ将に駿河を襲はんとすと。

七日、神祖、松平康親をして沼津城を守り、牧野康成をして長窪城を守り、天野康景をして興国寺城を守らしめ、以て不慮に備ふ。鳥居元忠・平巖親吉及び武川の将士甲州を鎮撫し、大久保忠世及び信州の将士上杉景勝の兵に備ふ。松栄紀事

九日、信雄の将佐久間駿河守正勝（右衛門尉信盛子、初称甚九郎）・山口長二郎重政（平兵衛盛政子、後為但馬守。晩年更称修理亮）五千余騎を率ゐ佐治新介拠る所の亀山城に向かふ。火を街巷に縦ち勢州嶺城に至る（秀吉譜・年譜附尾作長島城。今従太閤記・家忠日記・鵞峯文集・山口重政碑）故墨を修築し以て秀吉・蒲生忠三郎氏郷を邀（ま）つ。（右兵衛大夫賢秀子。後為飛騨守至参議従四位下。領奥州会津一百万石。）長谷川秀一・日根野備中守弘就等部属の兵合せ一万余騎、嶺城を攻む。尾州犬山城主中川勘右衛門及び關甚五兵衛（按ずるに、甚五兵衛、武田信玄の歩卒隊将なり。蓋し勝頼滅後信雄に事（つか）ふるなり）兵四千余騎を率ゐ嶺城を助け守る。堞壁（ちょうへき）（城壁上の低い垣）未だ成らず、敵を拒ぐ能はず。故に城外に戦ひ城兵利あらず。正勝・重政城に退き入る。甚五兵衛戦死す。城兵の死者三百余人。城将に陥ちんとす。敵兵、神祖援軍を為すを聞き其武威を畏れ敢へて進まず。

其の夜、正勝兵を率ゐ城を出で去る。（家忠日記○山口重政碑曰、十日、秀吉大軍来進隔川相戦。信雄兵敗走。重政提槍却敵扶正勝入城。我士卒為敵被遮不得入城者多矣。秀吉兵進迫城門。正勝与重政開門撃走之使我兵

入城中守之。其夜、正勝引兵還長島。附以備攷 勘右衛門将に犬山城に還らんとす。池尻平左衛門私忿を以て之を途に殺す。秀吉譜・年譜附尾。年云、勘右衛門赴長島城。将還。平左衛門殺之於途。而不書其故。家忠日記、叙事詳悉。今従之

十日、神祖兵を将ゐ浜松を発し、酒井忠次前鋒を為す。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事作七日。今従一本徳川記抄

十三日、神祖清洲に至る。信雄に謂ひて曰はく「秀吉兵を将ゐて来る。吾能く之を撃却せん。君其れ憂ふる勿かれ」と。信雄悦ぶ。年譜・創業記・秀吉譜 中川勘右衛門既に犬山城に死し守将無し。

十四日、池田勝入其の子之助（元助）と謀り村民を以て郷導を為さしむ。夜に乗じ犬山城を急攻す。城兵惶遽（こうきょ）（おそれうろたえる）し拒ぐ能はず。勘右衛門の叔父僧清藏主力戦し死す。城遂に陥つ。家忠日記・松栄紀事

是の夜、神祖清洲に在り。信雄に謂ひて曰はく「小牧山尾州中に在り。而れば必

ず争の地なり。砦を此に築き以て秀吉の軍に対すべし。明日須らく榊原小平大をして敵を偵(うかが)はしむべし」と。本多康重諫めて曰はく「往年武田勝頼我軍を侮り、川を渉り出で戦ひて利あらず。請ふ之を善慮せよ」と。酒井忠次曰はく「長篠の戦、我兵強練たり。今秀吉の兵柔弱にして兵法を知らず。豈に彼と同じからんや。明日、臣先に往き此地を取らん。敵無くは則ち烽火を以て之を報せん」と。

十五日、忠次先発す。神祖及び信雄出師し中路に忠次峰(烽)を挙ぐるを見る。是日、勝入父子進み小牧山に至る。側近火を縦つ。神祖煙の起つを見て曰はく「此必ずや勝入なり」と。急ぎ兵を進む。勝入速やかに犬山に帰る。神祖深く其の不意を撃たざるを憾(うら)む。遂に砦を小牧山に築くを下令す。

十六日、神祖落合邑に屯す。一本徳川記抄

十七日、森長可羽黒に陣す。酒井忠次神祖に謁して曰はく「長可勇猛なり。京師の人称して鬼武蔵と曰ふ。亦其勇を自矜せらる。請ふ、一戦し之を破り関西の人

をして喪胆せしめ、且は参河武士の勇を知らしめん」と。神祖之を許す。忠次即ち松平家忠・奥平信昌・松平家信・大須賀康高・丹羽氏次と兵を率ゐ火を楽田・羽黒・五郎丸の側近の民屋に縦ち以て之を却く。長可、尾藤甚右衛門一成と羽黒八幡林の鳥居の前に屯す。忠次諸将と之を攻む。両軍水を隔て士卒をして挑戦せしむ。雌雄未だ決せず。長可の隊長隅田内蔵允衆を麾(あつ)めて進む。奥平信昌銃手をして之を撃たしむ。内蔵允鉛に中りて斃す。長可怒り兵を進む。一成も亦之に従ふ。奥平信昌単騎水を渉る。余の衆争進奮撃す。長可敗れ走る。斬首三百余級。長可の兵野呂介左衛門還り戦ふ。松平家信時に平(年)十六、之と闘ふ。介左衛門躯幹長大にして膂力(りょりょく)人を邁(す)ぐ。大刀を揮ひ之を撃つ。家信幼弱なり。小刀を以て接戦す。料(武器)敵せず。刀を捨て相搏つ。介左衛門、家信を拏(とら)へて之を踣(たお)す。将に首を取らんとするに家信の従兵馳せ来り之を救ふ。家信遂に介左衛門の首を獲り之を上(たてまつ)る。神祖其弱(わか)くして勇敢なるを賞し書を賜ひ之を褒む。奥平信昌の先登の功

を奨め一文字刀を賜ふ。年譜・創業記・家忠日記・太閤記・一本徳川記抄・松栄紀事　池田勝入、子之助（元助）・稲葉一鐵・遠藤左馬助慶隆　後任但馬守。詳注于慶長五年　と兵三万余騎を率ゐ犬山下に屯す。森長可の敗るるを聞き大いに駭く。急ぎ羽黒に向かひ次いで戦はんと欲す。一鐵も亦鋭意戦を求む。勝入の兵片桐半右衛門和馬諫めて曰はく「敵兵勝に乗じ来進す。其の鋒当たるべからず。戦必ずや利あらず。高陽（丘）に拠り敵の至るを待ち以て戦ふに如かず」と。勝入之に従ふ。兵を分け三隊と為し犬山上に陣す。一鐵を待ち接戦せんと欲す。高きより直下に馳突し以て我兵を敗らんとす。候騎来て告ぐ。神祖下令し速やかに軍を撤せしむ。酒井忠次・奥平信昌等兵を収め小牧山に還る。勝入謀を失ひ兵を引きて退く。家忠日記・松栄紀事　尾藤一成、勝入・長可軍を監（み）る。秀吉大阪より書を馳せ之を戒めて曰はく「敵挑戦すと雖へども必ずや出兵すること勿かれ。勝入・長可勇を矜り敵を侮る。慎みて之をして軽戦せしむること勿かれ」と。太閤記・秀吉譜・一本徳川記抄・松栄紀事

臣按ずるに、小瀬道喜（小瀬甫庵＝『信長記』著者）評して曰はく「世人森長可を称(ほ)め父可成の勇武に似ると為す。遂に鬼武蔵の称有るに至る。其能く戦勝するは皆小敵に対するなり。此を以て大軍を擬(はか)る、此れ少年血気の為す所にして敗を取るの道なり。神祖数(しばしば)武田信玄と戦ひ軍事に老練たり。長可宜しく謀を審(はか)り尽(ことごと)く銃矢を羽黒色(邑)に備ふべし。林藪に翳(かく)れ其来進するを撃つは須らく日暮にすべし。夜に乗じ縦撃せば則ち縦(たと)ひ大軍たりとも或は能く勝たん。寡兵にして邑を離れ八幡林に陣す。此れ其敗るる所以なり。尾藤甚右衛門己の勇を矜り以て敵を侮る。気象長可と相類す。此を以て其軍を監るは秀吉公の過ちなり」と。臣竊(ひそ)かに謂ふ、然からずと。兵常の形無し。変化呼吸在り。紙上に兵を談ずるは甚だ易し。馬上の指麾は甚だ難し。彼能く之を為せば我必ず彼智慮の外に出で以て之を困せしむ。神祖の英略明敏なり。豈に彼の計に陥ちて、夜戦し敗を取らんや。秀吉公算を懸け爽せず（まちがわない）。書を馳せ以て之を戒む。其れ訾(そし)るべか

らんや。然れば其れ長可の勝るを恃(たの)み勇を衒(てら)ふを論ずれば則ち善し。

二十一日、秀吉の兵を将る十二万余騎大坂を発す。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

二十三日、神祖諸将に命じ蟹清水・外山村・宇田津村砦を修築す。

二十四日、比良城を築き要害と為す。春日部郡小幡の旧塁を修し砦を築き以て参州道路に通す。本多廣孝・穂阪常陸をして之を戍らしむ。家忠日記

二十七日、秀吉鵜沼川を渉り犬山城に至る。筒井四郎・伊藤掃部を以て前軍と為し、山崎源太左衛門・池田孫二郎・多賀新左衛門・浅野彌兵衛長政拠堀正意所撰浅野家譜、長政之父安井彌兵衛、与信長公弓手。浅野又右衛門長勝為親族。長勝無子養二女。長女嫁秀吉公。即高臺院也。次女嫁長政。長政有武幹。嗣浅野氏為弓手。事秀吉公。叙従五位下任弾正少弼。為五奉行之一・一柳市介直末又右衛門直高子。後為伊豆守二軍を為す。三好孫七郎秀次三位法印一路子。秀吉公甥。為三好山城守笑巌養子。冒三好氏。秀吉公養為子。授豊臣姓。至関白内大臣三軍を為す。長谷川秀一・日根野弘就四軍を為す。堀久太郎秀政後任左衛門督・長岡忠興五軍を為す。氏家久右衛門・

瀬田左馬允・木下半右衛門等六軍を為す。牧野長兵衛・蒲生氏卿(郷)及び甲賀の士七軍を為す。伊藤牛之助・高田小五郎等八軍を為す。八重葉左衛門・毛利河内守等九軍を為す。秀吉自ら中軍を将ゐる。織田三郎・冨田平右衛門知信 後為左近将監 ・片桐助作且元 初名直盛。後為東市正改今名 ・加藤虎之助清正 弾正清忠子。後称主計頭。叙従四位下。任侍従。肥後守。為肥後熊本城主 ・加藤孫六嘉明 信長公近臣三之丞子。嘉明後称左馬助。叙従四位下。任侍従。為奥州会津城主 ・糟屋助右衛門等後軍を為す。松栄紀事 秀吉楽田・羽黒を按行し小牧山に向ひ砦を築く。塹を二重に鑿つ。之を二重堀と謂ふ。高垣列柵す。日根野弘就・其弟彌次右衛門兵二千を以て二重堀を守る。稲葉一鐵・其子右京亮貞通・孫彦六典通、兵四千を以て巖崎山砦を守る。丹羽秀長兵八千を以て小松山城を守る。森長可兵三千を以て青塚砦を守る。蜂屋出羽守頼隆・金森長近兵三千を以て内窪城を守る。其余の村落林 巒(らん=みね) 皆陣営と為(な)る。家忠日記・秀吉譜・松栄紀事 酒井忠次使を清洲に遣はして曰はく「今夜此に宿す。速やかに食を餉(しょう)熟すべし」と。衆従は

ず。忠次曰はく「敵軍衆多く日已に晡（ほ）（日暮れ）に近し。晩に及びて戦ふは必ず敗る。秀吉軍事に長ず。我より挑戦すとも彼必ずや戦はず」と。神祖之を然りとす。松栄紀事　榊原康政小牧山を以て営と為すを請ふ。神祖之を許す。

二十八日、陣を小牧山に移す。内藤信成をして清洲牙城を守らしむ。三宅康貞・大澤兵部大輔基宿　左衛門佐基能子。歴侍従至左近衛中将　・中安彦四郎羅城を守り、本多重次星崎城を守る。家忠日記・松栄紀事　是人（是日カ）、我軍、森長可の営を切（おびやか）し、敵兵驚き擾ぐ。長可深く之を恥づ。創業記・家忠日記・松栄紀事

二十九日、信雄小牧山に至る。

四月朔、秀吉の後軍継ぎ至り山野に充満す。神祖の兵亦相継ぎて至る。信雄の兵と合せ一万八千余騎なり。

四月（ママ）、池田勝入犬山に至り秀吉に謁して曰はく「参河の兵多く小牧山に在り。想ふに必ず其国空虚ならん。今宜しく兵を潜め虚を襲ふべし。火を村里に縦ち岡崎

城を陥し軍を還し夾撃せば則ち小牧の敵兵敗走し支ふる能はず。指掌（極めて容易）の如し」と。秀吉沈吟し未だ発言せず。

五日、早旦、勝入固く謂ひて曰はく「事速断に在り。若し二三日を遅らさば則ち及ぶ無し」と。秀吉之を許し、且は之を戒めて曰はく「汝明日東参河に至り聚落を焚焼し速やかに班師（軍を返す）すべし。兵を分け篠木・柏井二墨を戍らしめよ。慎み軽戦すること勿れ」と。即ち三好秀次を以て援軍と為し森長可を副と為す。勝入喜びて曰はく「秀次・長可は我女壻なり。佗（他）兵を仮りず、立ちどころに参州を取り、以て羽黒の恥を雪がん。然らば翁壻出軍す。佗徴すべきもの無し（他に出軍させる者は不要だ）。願はくは別に将を賜ひ以て異日の証と為さん」と。秀吉乃ち堀秀政をして之に副へしむ。

是日、秀吉犬山より移り楽田に陣す。

六日、勝入、秀次を以て大将と為し、子之助（元助）及び長可・秀政・長谷川秀一と兵二

万余騎を率ゐ夜半参州に赴かんと欲し篠木・柏井に主たり。家忠日記・松栄紀事　是に先んじ、岡崎の商人某、九根（丸根カ）城に来、其計を酒井忠利に告ぐ。忠利単騎小牧山に至り之を神祖に白（もう）す。神祖之を諜覘（ちょうてん）せしめ其実を得。松栄紀事田（日）七日、篠木邑人来小牧山告之。神祖厚賞之。今従酒井家譜

八日、晡時、楽（楽田カ）曰烽を挙ぐ。神祖之を望みて曰はく「是れ必ず敵の出師なり」と。信雄と下令して曰はく「今須らく急ぎ小幡に赴くべし。敵軍をして之を知らしむる勿れ」と。乃ち酒井忠次・本多忠勝・石川数正・松平家忠及び信雄の兵を留め小牧山を守る。夜半大須賀康高・榊原康政・水野忠重・其子勝成・本多康重・松平家信及び信雄の将丹羽勘介氏次の兵合三千余騎を以て前鋒と為し小牧山を出づ。旗を巻き幟を匿し紙紮（さつ）（紙束）を以て馬銜（はみ）す。小幡砦に至り別に歩卒五十人をして龍泉寺側に至らしめ、以て形勢を覘（うかが）ふ。家忠日記・松栄紀事並曰、本多廣孝至龍泉寺側覘形勢而無歩卒之事。未知孰是。今従一本徳川記抄　夜小幡に至り軍事を議す。忠重曰はく「敵衆く我寡な

し。未だ志を得るに易からず。敵の軍列を聞くに、前軍は勝入、二軍は長可、三軍は秀政、四軍は秀一、後軍は秀次なり。今出て不意に後軍を掩撃（奇襲）せば則ち彼必ずや敗れん」と。諸将其議に従ふ。家忠日記・松栄紀事 諜、敵軍長鍬（長湫カ）を過ぐと告ぐ。是に於て七隊小幡を出て敵尾より之（ゆ）く。

是夜、四更（丑の刻）神祖兵五百を率ゐ 諸書或作三千 井伊直政三千を率ゐ 諸書或作二千 先鋒を為し小牧山を出づ。七隊の後に従ひ師を潜むること前の如し。故に敵人之を覚らざるなり。一本徳川記抄・小幡景憲伝○景憲伝曰、神祖議曰、戦于岡崎側必得取勝。然小牧相去頗遠。帰路危矣。戦于小牧側則秀吉必援之。須以長秋（ママ）為戦地。又謂、先鋒七隊兵寡敵兵最多。雖我兵一旦有利或不能遂勝。敵若遂我兵則隊伍必乱。以麾下之兵撃其乱則取勝必矣。故七隊先発小牧。後之可四里而神祖発兵従之。諸書為神祖先発者誤。故不取

九日黎明、勝入の前鋒伊木清兵衛・片桐半右衛門兵二千余騎を率ゐ丹羽氏次の巖崎城を攻む。氏次の弟二郎介氏重拒戦す。兵寡く敵する能はず。氏重戦死し城遂

に陥つ。勝入大いに喜び将に参州に入らんとす。秀次・秀一小幡東岳に在り。朝餐を飯し鞍を卸し士馬を休む。前鋒七隊の兵、秀次陣を急撃す。敵兵大いに駭(おどろ)く。水野勝成先登し首級を獲る。其余先を争ひ奮撃し斬獲多し。秀次・秀一大いに敗走す。諸将之を追撃す。年譜・創業記並去（云）諸将破秀次于稲葉村。家忠日記云、小幡東岳稲葉村即小幡東岳也。勝入・長可、秀次の殿（敗）を知らず。巖崎の捷に矜り獲る所の首級を検す。田中久兵衛吉政、秀次の使者と称し堀秀政の営に来、敗を告ぐ。秀政嗔(しん)目し之を叱して曰はく「汝三好家の重臣なり。而れば当に士卒を進退すべし。使を奉るは其職分に非ず。汝必ず遁逃して来るのみ」と。吉政言無くして退く。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事○秀吉譜書久兵衛怯懦（きょうだ）之状。極其醜詆（しゅうてい）。蓋不知其為吉政也。吉政後事秀吉公為兵部大輔。武功積累。関原之戦、尽忠于神祖賜筑後。称筑後守。豈懦夫而能至此乎。秀吉譜、全拠太閤記。而太閤記多出於愛憎者。未可尽信。今従家忠日記・松栄紀事。而刪（けずる）其余事　秀政兵三千余騎を率ゐ陣を整へ以て待つ。頃之(しばらく)して康政・長盛・康高・忠重等北(に)ぐるを逐ひ秀政の

陣に至る。秀政之を逆撃す。我軍長途を経、人馬疲頓す。遂に秀政の破る所と為る。秀次の敗兵勢に乗り還り闘ふ。本多康重苦戦す。身七創を被る。家忠日記・秀吉譜・松栄紀事　歩卒の隊将渡邉守綱其機を予見す。麾下に至り兵を趣けんと欲す。候騎内藤正成・高木清秀諸（これ）と途に過（あ）ふ。其の故を問ふに守綱曰はく「我軍利あらず。敵兵勝に乗じ隊伍整はず。麾下の兵を以て戦はば則ち必ず利有らん」と。正成・清秀曰はく「麾下遥かに隔つ。吾輩之を監ん」と。守綱還り前軍と合ふ。歩卒をして鳥銃を放たしむ。敵兵被（披）靡す（おそれひれふす）。諸士伝略　諸将進み秀政の陣を撃ち之を破る。加藤喜左衛門・成瀬小吉正成　吉右衛門正一子。後称隼人正　・小栗忠政・大久保忠佐・渡邉守綱・渡邉眞綱・其子六郎左衛門生綱等力戦し首級を獲る。

神祖平明（夜明け）勝川に至る。其名吉に応ずるを喜び方（まさ）に擐甲して（よろいを身にまとう）進み長湫東松山に到る。信雄亦た之に従ふ。榊原康政・岡部長盛来謁す。神祖康政の手を執り流涕して曰はく「吾聞く、汝輩利を失ふと。其の存亡を知らず。甚

だ之を憂ふ」と。今兵の恙無きを見甚だ喜ぶ。康政謝して曰はく「臣等寡兵を以て秀次三万の衆を撃破す。故に兵疲れ馬困(くるし)む。反りて秀政の敗る所と為る。今大旆(はた)を見決死に忍びず恥を含みて来たり。忠重・康高の如きは則ち敵を逐ひ猪子石に向かひて去る」と。秀政、勝入・長可と軍を合はせ復た戦はんと欲す。勝入・長可松山東に陣す。秀政と相距つること二町余。家忠日記・松栄紀事 渡邉守綱馳せ来たり神祖に白して曰はく「敵我兵を追ひ隊伍半ば乱れ前後離散す。麾下の兵を以て之を撃たば即ち利有らん。宜しく急ぎ兵を進むべし」と。内藤正成帰り言ひて曰はく「先鋒敗走す。請ふ、主公、軍を収め速やかに岡崎に帰らん」と。諸書皆曰、正成與清秀同言。今従一本徳川記抄。按ずるに、是時、神祖浜松に在りて岡崎と云ふ。蓋し之を通称するなり 高木清秀敵陣に馳せ入り首を提げ帰りて曰はく「我軍必ず勝つは此時に在り。其機を失ふこと莫かれ」と。本多正信傍に在り、之を聞き進みて曰はく「汝輩何ぞ之れ繆(いっわり)を言ふ。敵勢に乗り衆多し。我兵甚だ寡く、豈に当たるべけんや」と。守綱・

清秀怒りて曰はく「子、寵遇を得蒲団に坐す。財利を巧み放鷹を習ふ。何ぞ軍の勝敗を知らんや。今主公決断無し。故に其機を告ぐるのみ」と。神祖哂ひて曰はく「善し」と。即ち兵をして急ぎ進めしむ。井伊直政、将に直ちに正路を馳せんとす。三科肥前諫めて曰はく「山腰を繞りて進むに利あり」と。直政聴かず。近藤秀用馳せ来、其馬を控へ直政をして山腰に向かはしむ。直政乃ち長湫より東南の山腰に出づ。兵を分け三隊と為す。神祖亦た之に従ひ下令して曰はく「須らく総軍声を発し曳倒曳倒と呼べ」と。諸軍皆之に従ひ秀政を急撃せんと欲す。秀政の陣戦はずして敗走す。直政其陣する所の地を奪ひて陣す。麾下の銃手五百人右山腰に拠り銃を放つ。長可・勝入も亦た銃を放ち相持す。安藤直次神祖に白して曰はく「左の山麓より銃を放たば則ち必ず利有り」と。神祖之を然りとす。鵜殿兵庫を遣はし銃手に命じて曰はく「半を分け此に来れ」と。銃手方に敵と相挑む。半を分つこと能はず。又村越直吉・加加爪式部をして之に趣かしむ。竟に銃手四

十人を分けて来たり。左山麓より銃を放つこと雨の如し。敵勢大いに挫く。長可士卒を指揮し、衆に挺んで来前む。水野忠重の銃手銃を放ち、其額に中りて死す。家忠日記・松栄紀事曰、杉山孫六放銃　敵兵色を失ひて乱る。神祖声を励まして曰はく「阿壻の陣既に潰す。汝等蓋ぞ勝入を破らざる」と。諸軍進み之を撃つ。松栄紀事曰、直政分兵為三隊。急撃秀政之陣。秀政又敗。欲向楽田而去。勝入遣使止之。秀政之兵敗戦而疲。故不能従。按ずるに、秀政敗れ楽田に奔る。此後の事にして下文に在り。今一本徳川記抄に従ふ　鳥居金二郎・平松金二郎と槍を揮ひ先を争ふ。

是日、弟一の槍なり　松栄紀事○関原記大全載加藤嘉明之語曰、長鍬之戦平松金二郎功有。家□卿賞之、金二郎怨賞薄出奔他邦。家□卿怒曰「吾賞戦士。独金二郎一人逃賞、無礼之甚。赦之、無以令士卒」即捜捕斬之。此可為良法。今村桁之助擐甲せずして闘ひ弟二槍を為す。小野浅之助敵と相搏ち首級を獲る。我兵堅を摧き鋭を挫く。銃矢交発す。松栄紀事　神祖、筧助右衛門・渡邉半十郎を遣はし葵紋白旗・金扇馬標を金根山後に建て敵の意はざるに出づ。敵兵大

いに駭き散乱す。一本徳川記抄 神祖旗を颭(ゆら)し士卒を励ます。信雄と兵を合せ大いに喊(わめ)きて進む。敵兵悉く敗走す。勝入の兵秋田加兵衛・梶浦兵七郎・片桐與三郎・竹村小平太等、直政の兵と力戦して死す。勝入馬を失ひ秀政の陣に入らんと欲するも路遥かに隔たり復た合ふべからず。具に免れざるを知り麾を秉(と)り胡床に坐す。永井直勝槍を揮ひ之を刺す。勝入闘はずして首を授く。時に年四十九。安藤直次、其の子之(元)助を撃ち首を獲る。本多八蔵、長可の屍を得、其の首を斬りて其の長可たるを知らず、以為らく死者の首を獲るは勇に非ざるなりと。故に之を棄つ。其の佩刀を取り以て他日の証と為す。井伊直政・水野勝成手づから敵を斬り級を獲る。家忠日記・松栄紀事 鈴木重好、直政の右軍に在り。奮闘し三級を獲る。鈴木重好 渡部守綱・成瀬正成・蜂屋七兵衛・木津清右衛門・大久保忠鄰皆力戦し功有り。秀次・秀政、勇敢を以て名を得ると雖へども神祖に遇ひて大敗す。篠木・柏井を経、僅かに免かれ楽田に奔る。我兵北ぐるを遂(遂)ひ敵を斬る。勝(あげ)て計(かぞ)ふべからず。凡そ

獲首一万五千余級なり。年譜曰、一万余級。今従家忠日記・松栄紀事 神祖、大久保忠佐・渡邉守綱に命じ首級を検し戦功を定む。永井直勝、勝入の首及び麾佩刀、篠雪と号するを併せ之を上る。神祖悦び之を信雄に致し、井伊直政及び直勝に弓を賜ふ。信雄も亦た直勝の功を賞し勝入の佩刀を賜ふ。本多八蔵、森長可の刀を上る。然るに以て其首を棄て功を録さず。八蔵甚だ之を悔む。内藤正成・高木清秀神祖を諫めて曰はく「秀吉軍機に敏く其敗を聞かば必ず当に来戦すべし。我軍旦（日の出）より午に至り接戦し甚だ疲る。今新兵と闘はば則ち必ず敗を見ん。勝を全うして退くに如かず」と。神祖之に従ふ。乃ち信雄と軍を収め小幡に還る。秀吉譜・年譜附尾並云、本多正信・内藤正成諫神祖。今従松栄紀事 秀吉楽田に在り。秀次の敗を聞き馬に策し急ぎ龍泉寺に赴く。二万余兵相踵して至る。小牧山の守将酒井忠次・本多忠勝・松平家忠虚に乗じ楽田の営を襲撃せんと欲す。石川数正、秀吉の誘ふ所と為り潜かに異図を蓄ふ。故に出兵せず、固く之を沮（はば）む。忠次・家忠大いに怒り其貳（ふたごころ）有るを

疑ひ、兵を収め営に還る。本多忠勝五百余兵を将ゐ春日井を経、秀吉を追ふ。大軍に抗して並行し相距つること纔かに四五町。勇気勃然、時時歩卒をして銃を放ち秀吉軍を撃たしむ。部兵永井與二郎の馬敵軍に逸れ入る。與二郎之を追ひ大軍中に入る。忠勝其危きを見、単騎陣を犯し遂に馬を得與二郎に授け、与俱(とも)に帰る。秀吉の前鋒之を撃つを請ふ。秀吉曰はく「勇士なり。之を撃つ勿かれ」と。忠勝小幡に至り神祖に請ひて曰く「臣の一軍今日の戦に与(あず)からず。士馬雄建たり。願はくは水野忠重の兵を以て益し、龍泉寺之営を夜襲せば則ち秀吉の首を獲ること必なり」と。神祖其言を壮として許さず。忠勝固く請ふ。神祖曰はく「今日の戦、吾大勝を得。勝に矜らば則ち危ふし。況んや秀吉の勇略群を出づ。其れ侮るべからんや。日既に晩し。秀吉兵を引き田中に至る。明旦を待ち決戦せんと欲す」と。其夜、神祖信雄と平戸を経、小牧山に還る。秀吉之を聞き掌を拊(う)ちて曰はく「家□卿の用兵は変化不測にして神の如し」と。

十日、秀吉田中を去り楽田に還り小松寺山に屯す。塹を鑿(うが)ち砦を築き小牧山の三面を囲む。西は則ち日保曼陀羅寺、東は則ち二重堀より小松寺山に接す。北は則ち青塚小口。楽田の軍士霧合に雲屯す（雲のように多く集まる）。長湫の戦、秀吉の兵多く死すと雖へども猶ほ数万騎有り。分け七隊と為す。松栄紀事曰東西中軍三隊。今従家忠日記神祖兵一万八千余騎を分け十六隊と為す。二重堀より前(すす)み東野に至る。整陣して列す。酒井忠次・井伊直政・松平家忠前鋒を為す。敵将長岡忠興・蒲生氏郷・堀秀政・長谷川秀一、兵一万余騎を率ゐ二重堀を守る。我軍の出づるを見使を馳せ秀吉に告げて曰はく「小牧の兵勝負を一挙に決せんと欲す。請ふ、麾下を分け援兵を為せ」と。秀吉同じく之を止めて曰はく「小牧の兵来攻せば則ち陣を整へ之を拒げ。必ず我より戦を作す勿かれ」と。神祖亦た下令して曰はく「敵二重堀を越して来前(すす)まば則ち当に接戦すべし。然らずんば必ず挑戦する勿かれ」と。故に両軍相待ち戦はず。日既に午を過ぐ。神祖軍を撤し小牧山に還る。年譜・創業記・家忠

日記・松栄紀事○家忠日記・松栄紀事並曰、秀吉与神祖講和。文禄年中在肥前名護屋。与神祖談軍事。秀吉問曰「往年楽日（田カ）小口置陣相対何不撃退二重堀之兵」。神祖曰「当時下令云、『小松山之敵来進則当接戦。不然勿使自我出兵』」。秀吉曰「其意如何」。神祖曰「我兵攻二重堀、則楽田之兵必夾撃敗之。故将佐欲戦、吾固戒之」。秀吉大感其言曰「吾以二重堀兵為餌。卿必来撃。然則薬（楽）田大軍夾撃不使一人且還。故吾亦下令。不使出兵。卿能察見吾肺腑可謂奇矣」。神祖亦称秀吉之将略。聞者皆嘆服

十四日、秀吉羽黒の旧墨を修し堀尾茂助吉晴 中務吉久子。後称帯刀先生（せんじょう）。領出雲隠岐 ・山内伊右衛門一豊 但馬守盛豊子。後為対馬守。更土佐守領土佐 ・伊藤掃部助をして之を戍らしむ。十余砦を築き以て小牧山に対す。家忠日記・松栄紀事

二十二日、秀吉兵六万余騎を将る青塚に至る。二重堀を修し木村常陸介定光・神子田半左衛門・小寺官兵衛孝高 美作守識隆子。後更黒田氏。秀吉公之謀臣剃髪号如水 ・明石右近をして之を戍らしむ。

其の夜、信雄の兵二重堀を襲ひ多く首級を獲る。敵将長岡忠興之を撃ち却く。年

譜・創業記・家忠日記・松栄紀事　榊原康政、楽田の陣営に移書（廻状）して曰はく「秀吉、君恩を蔑如し信雄卿と難を構ふ。滔天（とうてん）（天をあなどる）の罪孰（たれ）か之を悪まざる。凡そ将士に在りて何ぞ大義を忘れて不義の人に党（くみ）せんや」と。秀吉之を聞き大いに怒る。能く康政の首を得る者之を厚賞すと下令す。松栄紀事

五月朔、秀吉、堀秀政を楽田に留め加藤光泰をして犬山城を守らしむ。兵八万余騎を将ゐ将に大阪に帰らんとし、美濃に赴き宇留浮梁を渡る。小牧の諸将出で之を撃たんと欲す。神祖許さず。剽悍なる壮士十五六騎進み撃ち首十余級を獲る。家忠日記・松栄紀事

三日、信雄、秀吉班師するを聞き小牧山を出で勢州河内城に入る。家忠日記　秀吉以為（おも）へらく、百里暴師し功無くて還る、必ずや人の笑を取ると。遂に信雄の管内加賀井・竹鼻二城を攻め之を抜き、大垣城に入る。

六月十一日、秀吉多芸に軍し直江砦を築き丸毛三郎兵衛をして之を戍らしむ。兵

を引き大垣に還る。

十二日、神祖酒井忠次をして小牧山を守らしめ、兵を収め清洲に還る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

臣按ずるに、孟子曰はく「春秋義戦無し。彼此に善からば則ち之有り（利益のある方と友好的なのだ）」と。応仁以来、群雄割拠、四海鼎沸、下陵上替。無日不用の干戈に生民の塗炭此に至り已に極まる。而るに其の所謂義戦を求むる者蕩然（あとかたない様）として有る無し。唯だ秀吉公のみ山崎の戦に故君の讎を討ち逆賊の首を得。義戦と謂ふべし。故君を紫野に礼葬し躬（みずか）ら群臣を率ゐ以て哀慟を極む。能く臣節を尽くすと謂ふべし。然るに□（墳カ）杵未だ収まらざるに信孝を内海に殺す。其の岐阜の幼君を視ること弁髪（べんぱつ）然（役立たず）の如し。其の心術を究め仁義の名を仮借（借りる）し以て其の私を済（な）す。猶ほ久しく及ぶ能はず、仮りて帰せざる者のごとし。況んや敢へて其余（それ以上を）を望まんや。信雄忿忿（激しい怒り）の心に勝（た）へず。起

兵し之を討たんと欲す。而るに敵する能はず。師（軍隊）を浜松に乞ふ。而して神祖之に応ずること影響（反応）より捷（はや）し。初め本能寺の変に神祖、航して参河に還り大いに義旅を興し以て賊臣を討たんとす。秀吉公の捷報（素早い仇うちの知らせ）鳴海に至りて班師す（軍を返す）。大義已に天下に伸ぶ。而るに又信雄を援け以て大敵を拒ぐ。長湫の戦に三梟将（勇猛な将）の首を斬る。而れば敵軍魂褫氣懾（こんちきしょう）す（すっかりおじけづく）。全師勝を制し謀略神の如し。秀吉公十万の兵を将る其方略を施す所無し。終に講和に至りて修好す。神祖の義挙非ずは則ち信雄の敗衂（じく）（戦に負けること）翹足（つまさきだつ）して待つべし（大意＝神祖の義に感じた挙兵がなければ信雄の負けはすぐのことだったろう）。其れ故旧を遺（わす）れず信義に篤し。未だ嘗て一毫の利己の心も有らず（大意＝神祖は昔からの関係を忘れず信義に篤い、少しも利己心をもたなかった）。弔民伐罪の師に非ずと雖へども（民をいたみ悪を討つ戦ではなかったが）彼の此（これ）に善きに過つ者多し（（秀吉の）人たらしに道をあやまつ者は多い）。

滝川一益、長島城主として伊勢五郡を領す。柴田勝家の滅後、援を失ひ越前大野に流寓す。秀吉其材武を惜しみ食邑五千石を給ふ。冨田知信と勢洲木造城を戍る。秀吉、信雄と兵を構ふるを聞き功を建て以て秀吉に結ばんと欲す。是に先んじ、信雄の将佐久間正勝蟹江城を守り、前田甚七郎長種（後為対馬守）前田城を守る。長種の部曲前田與平次下市場城を守り、山口重政大野城を守る。是に至り、信雄、正勝をして萱生砦を築かしむ。正勝、前田與十郎を蟹江城に留め萱生に赴く。與十郎、一益の表兄弟（ひょうけいてい）（父の兄弟の子以外のいとこ）なり。（表兄弟、拠年譜附尾）故に一益其間を伺ひ使を遣はし與十郎を秀吉に属させんと説く。蟹江城を翻（くつがえ）し内応を為さしむ。長種・與平次も亦之に党す。九鬼右馬允嘉隆（宮内大輔定隆子、後更大隅守）一益と同謀す。一益舟に乗り将に蟹江城に入らんとす。與十郎烽を挙げ応を為す。神祖清洲に在り。煙の起つを見其の計に及ぶ有るを知る。井伊直政をして之に進撃せしめ、親（みずか）らは兵を将る後継を為す。内藤家長前み闘ひ敵数人を斬る。水野勝成奮戦し、一益入

城するを得ず。山口重政の母質として城中に在り。故に一益・嘉隆使を大野城に遣はし之を招く。重政可(き)かず。一益怒り嘉隆と兵を合せ之を攻む。重政の兵寡く敵し難し。急を神祖に告ぐ。信雄及び正勝援を乞ふ。敵兵城を攻むること甚だ急なり。戦艦数十艘を大野川に浮かべ以て城に迫る。重政炬を投げ其二艘を焼く。敵兵騒擾し船を緑提に下りて陣す。神祖重政の報を聞き直政をして之を救はしむ。信雄亦援軍を遣はし之を撃ち却く。既にして信雄大野城に来重政を労(ねぎら)ふ。神祖戸田に屯す。重政を召し其の拒守の功を褒め良馬を賜ふ。家忠日記・松栄紀事

十六日、一益兵を前田・下市場二城に納む。

十八日、神祖、石川数正・安倍彌一郎及び信雄の兵をして前田城を攻めしむ。城主前田長種力屈し降を乞ひ城を致して去る。

十九日、神祖・信雄下市場城を攻む。九鬼嘉隆舟師を率ゐ城に入らんと欲するも潮落ち進み得ず。岡部彌二郎長盛之を撃破す。長盛、二郎右衛門正綱子。後任内膳正　嘉隆遁

れ去る。一益も亦海に泛びて走げんと欲す。信雄の兵戦艦数十艘に乗り之を追ひ一益の馬標を奪ふ。間宮造酒允信高、一益の船に入り力戦して死す。

其夜、下市場城陥つ。前田與平次前日城を出て遁れ去らんと欲す。山口重政の兵之を追撃し其首を獲る。一益僅かに遁れ蟹江城に入り拒戦す。本多八蔵曋（さき）に森長可の首を棄て其功を録さざるを恥ぢ奮闘して死す。是日、一益の子三九郎殿（しんがり）を為し、水野勝成横から撃ち之を破る。

二十日、我兵獲首する所の一百二十余級を小幡山に梟す。

二十二日、神祖・信雄兵を将ゐ蟹江城を囲む。酒井忠次・松平家忠・丹羽氏次・天野周防守及び長澤の兵城の東南海門寺口を攻め、大須賀康高城北を攻む。信雄の兵城西を攻め城兵固守し拒戦す。忠次・家忠・酒井忠利・松平康安等力戦し之を破る。忠次の兵疲る。晩に及び榊原康政、忠次に代りて之を攻む。其夜、康政・家忠急攻し弟（第）二城・弟（第）三城を破る。一益窮蹙し僅かに牙城を保つのみ。家忠日記・松

栄紀事

二十八日、小牧の戍兵出て楽田の営を覘ひ敵と闘ひ首数級を獲る。我兵も亦死傷す。年譜・創業記

二十九日、一益力弾け和を請ふ。信雄、神祖に謂ひて曰はく「一益、信長に事へ功有り。之を殺すに忍びず。其命を丐（＝乞）ふ」と。神祖之を許す。一益を諭して曰はく「城将前田與十郎の首を斬り其無貳を誓はば則ち汝を舎す」と。

七月三日、一益、與十郎を殺し首を神祖に献じ誓書を上り降を乞ふ。神祖之を許す。一益神戸に走る。太閤記曰、六月二十七日、一益乞降。走木造城。今従年譜・創業記○家忠日記・松栄紀事

秀吉一益を救はんと欲し兵を将る大垣より蟹江城に向かふも既に陥つ。故に兵を引き径ちに大阪に帰る。秀吉譜○家忠日記並云、帰京都。按ずるに、是時、秀吉公未だ嘗て京都に居らず。蓋し当時概ね大阪を称し京都と曰ふ。（権力者のいる所が都）今其実に従ひ大坂と書く

其後一益京都妙心寺に寓す。秀吉其の丹羽長秀の姻戚たるを以て之を越前に放つ。家忠日記・松栄紀事

臣按ずるに、滝川一益、信長公の時に当たり必中を謀り戦必ず克つ。智勇其の右に出づる者無し。信長公の弑せらるるに及び勢変事に去り孤立無援たり。秀吉公其才を惜しみ木造城に居せしむ。而るに貪功徼利（徼＝もとめる）の心、終に息む能はず。表の親に中るを以て前田與十郎を誘ひ之をして信雄に叛して己に党せしむ。蟹江城を奪ひ以て秀吉公に媚びて神祖と鋒を争はんと欲す。何ぞ其れ自ら量らざらる（自分で考えればよいのに）。勢蹙り計窮するに至るに及べば則ち與十郎を斬り以て苟免（一時しのぎにのがれる）を図る。何ぞ其れ不義の甚だしき。智勇倶に困し北越に流死す。謀之れ臧からず。終に身を容るるの地無し。豈に天其魄を褫ひ狼狽し此に至らんや。

五日、神祖桑名に至り砦を四日市場に築く。

十三日、清洲に還る。

十五日、楽田の戍将屢候騎を出し小牧の営を覘ふ。小牧の戍兵之を撃却す。年譜・

創業記・家忠日記・松栄紀事

八月十六日、秀吉兵八万六千を将ゐ又濃州に至る。創業記・秀異（ママ）日、或云十六万騎。今

従創業記正文及松栄紀事　前鋒楽田羽黒に陣す。

二十一日、秀吉進み上奈良五郎丸に屯す。

二十七日、神祖松平家忠をして羽黒楽田に圭（至カ）り敵陣の形勢を偵（うかが）はしむ。

二十八日、秀吉楽田近邑を焚掠す。神祖清洲より岩倉に陣す。

九月朔、松平家忠楽田に出兵し秋稼を取る。

七日、秀吉陣を茂呂に移す。

二十五日、秀吉上奈良・河田・大野三邑に砦を修し兵を置き之を戍らしめ、引き大垣城に入る。年譜・創業記並云、十七日秀吉引兵而退。拠家忠日記〇十七日退自小堀。二十五日入大垣。今従之

二十七日、神祖清洲に還る。

是月、神祖菅沼小大膳定利（松栄紀事作正家。今従菅沼系図。説見元亀二年）・保科正直・諏訪頼忠をして信州妻籠城を攻めしむ。秀吉兵を遣はし之を援く。定利囲を解きて去る。城兵之を尾撃すること甚だ急なり。正直、殿を為し之を撃ち却け師を全うして帰る。（家忠日記・松栄紀事）

十月、神祖重ね小牧の要害を修し松平家忠・菅沼定盈をして小幡城を守り、酒井忠次をして清州城を守り、榊原康政をして小牧を守らしむ。

十七日、神祖軍を歛（おさ）め岡崎城に還る。（年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事）是月、駿州長窪城を牧野康成に賜ふ。（家忠日記）

十一月六日、秀吉伊勢に至り羽津に陣す。蒲生氏郷をして名穂生城を守り（家忠日記名穂生作縄生。国音相近）蜂須賀彦右衛門正勝をして桑部を守らしむ。（正勝、小六正利子。叙従四位下。任修理大夫）信雄、長島桑名に屯し秀吉と相持す。

九日、神祖岡崎より清洲に至り、之の為に声援す。秀吉富田知信・津田隼人正に

謂ひて曰はく（徳川歴代曰隼人正名信秀。未知是否）「我右府の厚恩を受くること口舌の能く尽くす所に非ず。故に賊臣光秀を誅し立（たちどころ）に君讎を報（かえ）す。右府霊有り。豈に地下に忻忻（きんきん）たらざらんや（地下でよろこんでいるだろう）。信孝・信雄讒を信じ我を伐たんと欲す。故に已むを得ず挙兵し之に応ず。此れ豈に我が素忘（志カ）ならんや。不幸信孝禍に罹る。今信雄と講和せんと欲す。明神に誓ひ以て赤心佗（他）靡（無）し。卿曹（けいそう）（君ら＝主君が家来を呼ぶ）宜しく其意を体すべし」と。知信・隼人正深く其言に感ず。桑名の営に至り上（土カ）方勘兵衛雄久（彦三郎某子初襲称彦三郎。後為河内守）に就き其言を信雄に告ぐ。信雄喜びて之を許す。秀吉大いに悦ぶ。

十一日、秀吉・信雄、矢田河原に会ふ。（年譜、矢田河原作町屋川。今従家忠日記・秀吉譜・松栄紀事。按ずるに、秀吉譜、太閤記に拠り講和を以て十月二十日と為す。徳川記も亦十月二十日と為す。並び誤る。）秀吉、従者纔かに数人、先に盟所に至り信雄の至るを待つ。縶跽（けいき）曲拳（体を丸めひざまずく）流涕して曰はく「今日天の保佑を以て主君の顔に拝するを得幸甚なり。乃ち良

劔を献じ之に厚礼せん」と。信雄、知信・隼人正をして秀吉に諭さしめて曰はく「犬山吾嘗て領する所なり。願はくは之を得ん」と。秀吉命（めい）を奉（う）けて退く。両軍凱旋す。神祖会盟既に成るを知らず、清洲に在り。之を聞き石川数正を以て使と為し秀吉に賀す。

十六日、神祖清洲を発ち岡崎に還る。徳川記、為十一日。今従年譜・創業記・家忠日記・秀吉譜・松栄紀事 凡そ小牧長湫の戦、将士功有る者勝（あ）げて計るべからず（数えきれない）。神祖之を賞す。或は書牒を賜ひ或は采邑を給ふに各差有り。畠山左衛門佐貞政左衛門督昭高子 神祖の旨を受け根来雑賀の兵を督す。信雄の報を待たんと欲し後より楽田を攻む。長曾我部土佐守元親信濃守覺世子。歴宮田少輔侍従。任土佐守 貞政と合謀し将に大阪を侵さんとす。和議成るを以て各兵を解き去る松栄紀事

臣按ずるに、松栄紀事曰はく「相伝ふ。秀吉の智計殊絶す。故に信長の恩を忘れずと託す（かこつけるに）。而して和議を為す」と。其実は神祖の勇略敵し難きを

知る。故に此挙を為す。而るに信雄悟らず、神祖に告げずして講和す。人皆其義気無きを譏(そし)るなり。太閤記曰はく「信雄の営中群疑沸騰す。故に和議速やかに成る」と。臣竊に謂ふ「此れ必ず秀吉公反間を縦(ほしいまま)にし信雄をして眩惑せしむるなり」と。故に告げずして和親す。神祖の義挙に負ひ大いに将士の心を失ふ。人に制せられて人を制する能はず。宜しく其れ終に秀吉公に見放されたるべし。徳川歴代曰はく「信雄勇有り。果敢ならず。事に臨み謀慮無し。人の言を軽信し終に其累を受く」と。斯(この)言之を得たり

二十一日、神祖岡崎を出て浜松城に還る。年譜・創業記

二十二日、秀吉権大納言と為り従三位に進む。公卿補任・家忠日記・秀吉譜　秀吉大阪に在り。羽柴勝雅・冨田知信・津田隼人正を浜松に遣はし和を乞ふ。神祖将佐を集め之を議る。石川数正進みて曰はく「秀吉天下の半を領し豪傑響応（呼びかけにすばやく行動する）す。主公の兵其半に及ぶ能はず。北に上杉景勝有り、東に北條氏政有り、三

面に敵を受く。則ち終に志を得難し。願はくは早く和を許し以て長久の計を為せ」と。神祖怒りて曰はく「吾兵寡と雖へども豈に秀吉の大軍を畏れんや。今秀吉と勝負を決せず、更に何れの日を待たんや」と。固く拒み受けず。三使虚しく帰る。

松栄紀事

十二月十四日、信雄浜松に来。酒井重忠の家に至り神祖の援助の労に謝す。翌日、浜松城に享(もてな)す。信雄従容として神祖に謂ひて曰はく「卿、素(もと)秀吉と仇讎有るに非ず。特(た)だ吾に援を為し発兵交戦するのみ。今吾秀吉と講和す。卿も亦怨を釈(ゆる)し和親せよ。一公子を大阪に遣はさば則ち秀吉養ひ子と為し、永に以て好を結ばん。此れ秀吉の志なり」と。神祖已むを得ず之を許す。

二十五日、信雄将に清洲に還らんとす。神祖之をして吉良に放鷹せしめ松平家忠に之を享すを命ず。其後、神祖長庶子於義麻呂を大阪に遣はす。時に年十一。石川数正の子勝千代・本多重次の子仙千代焉(これ)に従ふ。仙千代後称丹下。名成重。為飛騨守○高力

系図曰、是年、神祖与秀吉講和。以高力與左衛門清長為使。秀吉賜豊臣姓。叙従五位下任河内守。按ずるに、神祖の講和、下文十四年に在り。清長使を奉するは蓋し其時なり。附し以て考に備ふ　秀吉大いに悦び於義麻呂を養ひ子と為す。羽柴氏を授け秀康と名づく。参河守に任じ采地一万石を河内に給ふ。年譜・家忠日記・秀吉譜・松栄紀事、采地一万石。拠創業記○年譜・創業記並云、十二月十二日、遣秀康於大阪。十四日、信雄来浜松謝援兵。按ずるに、秀吉公、数和親を請ふも神祖之を曖拒す。信雄秀吉公の意を述べ然る後神祖之を許す。先に於義麻呂を大阪に遣はすべからずして後信雄、神祖に説く。家忠日記・松栄紀事、日を係けず。但し其の後と云ふ。今之に従ふ　神祖、杲（異カ）父弟定勝を以て秀吉の養子に為さんと欲す。大夫人、其兄康俊甲州に質せられて僅かに帰るを免ぜらるるを得るに懲り、聴かず。故に於義麻呂を遣はす。家忠日記・松栄紀事

是月、越中冨山城主佐々成政山路を歴、深雪を冒して浜松に来。本多忠勝に就き神祖に謂ひて曰はく「請ふ、再び起兵し秀吉を撃て。則ち越中より出兵せん。東北合はせ撃たば必ずや大勝を得ん」と。神祖可（き）かずして曰はく「吾、秀吉に怨仇

無し。前日の事、信雄の急を救ひ以て信長の厚眷に報いしのみ。吾既に五州を統領す。縦(たと)ひ秀吉を滅ぼすとも豈に卿の兵力を仮りんや」と。成政大望（身の程過ぎたのぞみをもつ）して去り清洲に至る。信雄に再出師を説く。信雄許さず。其後秀吉之を聞き大いに怒る。年譜及松栄紀事。一説並云。秀吉欲撃北国。成政来浜松乞援。神祖許諾遣人視行陣之路。還報曰、信飛之険隘不易出兵。故止。今従創業記・家忠日記及松栄紀事正文

十三年乙酉正月十六日、神祖岡崎に如く。年譜・創業記・家忠日記。及松栄紀事正文

是月、北條氏直、使を浜松に遣はし、下野佐野城を攻め之に克つを告ぐ。城主佐野修理亮宗綱の首を送る。創業記・松栄紀事、宗綱、小太郎昌綱子。襲称小太郎

二月、神祖浜松に還る。参州の諸将に吉良城を築くを命ず。家忠日記・松栄紀事

三月十日、秀吉内大臣と為り正二位に進む。公卿補任・家忠日記・秀吉譜　小牧の戦に根来寺の僧徒、神祖及び信雄に属し大阪の側近を焚掠し泉州を侵す。岸和田城主中村孫平次一氏、之を撃破す。孫平次後為式部少輔。遷駿府城主

四月、秀吉兵を将ゐ根来寺を攻め之を滅す。　創業記・家忠日記・秀吉譜・松栄紀事

是月、神祖甲州を按行す。

六月七日、浜松城に還る。　年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

七月十一日、内大臣秀吉、関白と為り従一位に進む。　公卿補任・家忠日記・秀吉譜

十九日、神祖駿府に如く。是に先んじ、神祖甲州に在り。北條氏直と上野沼田を以て佐久郡と易ふるを約す。　松栄紀事曰、佐久・都留二郡。按ずるに、十年佐久一郡と定め為す。家忠日記亦都留郡無し。今之に従ふ　是に至り氏直沼田の地を請ふ。神祖使を信州上田に遣はし、真田昌幸をして沼田を以て氏直に予へしむ。昌幸対へて曰はく「沼田、君侯の賜ふ所に非ず。亦氏直の授くる所にも非ず。昌幸自ら兵力を以て取る所なり。庸詎ぞ輒ち（たやすく）氏直に予へんや。往年氏直甲州に相持し昌幸君侯に属す。忠を戦場に尽くして僅かに上田斗大（小さい）の城を給ふ。常に論功の薄きを怨む。今何の罪有りて遽に沼田を奪ひ氏直をして之を有せしむるや。使者をして復た来しむる勿

れ」と。遂に神祖に叛す。其状を大阪に訴へ秀吉麾下に属す。秀吉大いに喜び、印章を授け上杉景勝に命じ之の声援を為さしむ。

八月、神祖、大久保忠世・鳥居元忠・平巖親吉をして兵を将ゐ昌幸を撃たしむ。岡部長盛・柴田康忠・諏訪頼忠・保科正直・矢代勝永及び知久・遠山・武川・蘆田等甲斐・信濃の兵合はせ七千余騎なり。

閏月二日、諸将上田城を攻む。城兵戦に出でず。我兵之を侮る。第二城に進み入り火を縦たんと欲す。柴田康忠曰はく「我既に郭内に入る。敵急に来撃し火を縦たば則ち出づるを得ず」と。故に之を止む。昌幸、持田出羽・高月備中をして四百余兵を以て城を守らしむ。松栄紀事、以時（持）田出羽為昌幸弟。按ずるに、真田系図、昌幸弟唯隠岐守信尹のみ有り。初め葛野市右衛門と称して時（持）田出羽無し。未だ何に拠るかを知らず。故に闕疑し其弟を書かず。長子源三郎信幸 後為伊豆守。幸或作之。按ずるに、年譜・松栄紀事信次と作す。蓋し誤る。今真田系図に従ふ 二百余兵を率ゐ城門を守る。昌幸自ら八百余騎を率ゐ街巷に列柵し以て道

路を塞ぐ。土民三千余人をして紙旗鳥銃を執り山谷に伏せしむ。我兵街口柵に進攻す。出羽・備中伴ひ城に退き入る。我兵隊伍を乱し之を追ふ。信幸進み将に之を撃たんとす。我兵猶予（とどまる）し、真幸大喊し横から之を撃つ。伏兵一時に斉発し声山谷を震はす。信幸及び出羽・備中亦城を出奮撃す。我兵敗績し街口に退至し柵木に礙（さまた）げられ出づるを得ず、戦死人多し。皆柴田康忠外郭を焼かざるを咎む。大久保忠世・平巖親吉銃矢を放ち敵を拒ぎ兵を引き退く。忠世の兵本多主水・親吉の兵尾崎左門兄弟、殿を為す。昌幸之を尾撃す。左門兄弟力戦して死す。我兵僅かに免る。鳥居元忠・平巖親吉軍を還し隊を整へ歩卒をして銃を放たしむ。昌幸、信幸及びその弟左衛門佐信仍（信仍、諸書皆作幸村。今拠左衛門佐手筆、訂之）をして五百騎を率ゐ横から之を撃たしむ。昌幸・信仍直ちに前み衝突す。元忠敗走し、昌幸・信仍勢に乗り追撃す。忠世僅かに千四五騎を以て之に当たる。退き加賀川に至る。我兵の死者三百余人。唯だ酒井與九郎のみ独り首級を得。時の人之を称ふ。忠世

留り川上に在り。弟忠教其幟を見、還り闘ひ敵一騎を斬る。忠世の旗を竪て敗兵稍稍（だんだん）と来集す。保科正直・諏訪頼忠衆に挺（ぬきん）で力戦す。二家の兵死者多し。忠世、兵三百余人を得岡阜に布陣す。昌幸、川上に陣す。両軍相距つること三十歩ばかり。忠世使を元忠・親吉・正直の陣に遣はして曰はく「我将川を渉り敵を撃つ。彼をして城に入ることを得ざらしめよ。請ふ、三子出兵し後継を為せ」と。元忠使者に謂ひて曰はく「我兵撓（とう）敗す（敗れる）。復びは捩（もど）るべからず。縦ひ川を渉り戦勝とも城兵及び上杉景勝の援兵大軍にて競進せば則ち勢当たるべからず。彼若し川を渉りて来たらば便ち決戦すべし。我より争鋒すべからず」と。親吉・正直も亦兵を出さず。忠世独り進む能はず。柳（ママ）怒して止む。既にして昌幸兵を引き城に入る。其の、水を渉り来戦せざるは、忠世川上に相持するの功なり。

三日、忠世、柴田康忠と信州の兵を率ゐ筑摩川を渡る。八重原に出で将に九子（丸子）城を攻めんとす。昌幸之を見、出でて手白塚に陣す。忠世、康忠を以て使と為し元

忠・親吉に謂ひて曰はく「速やかに出兵し此に来るべし。我岡部長盛・松平源十郎・諏訪頼忠等と兵を合はせ敵を撃ち之を禰津原に蹙(おしつ)む。一人として生還せしめざらん」と。元忠曰はく「昌幸素(もと)謀略多し。自ら其地に戦ひ能く険夷を諳(さと)る。援軍後に在り。軽戦すべからず。彼歩卒を出し我に備ふ。此れ必ず我を誘ひ険隘に陥し、大軍之を夾撃する謀なり。前日の戦彼の誘ふ所と為り、以て敗を取る。持重するに如かず。鋭を養ひ機を見て進め」と。親吉も亦出兵を肯(がえん)ぜず。康忠憤懣たりて帰り忠世に告ぐ。忠世、其の敵を畏るるに怒り、又使を遣はして曰はく「二子出兵する能はざらば則ち我後に継ぎて来声援を為せ」と。元忠・親吉又従はず。往復の間、昌幸兵を収めて去る。忠世大いに怒りて曰はく「我が兵の寡を以て籠中の鳥をして脱去せしむるは奈何(いかん)すべき」と。忠世独り丸子を攻むる能はず、八重原に屯す。其間を伺ふを以て昌幸城外に出づること十町ばかり、相対に陣を置く。諸将敢へて戦はず。候騎を遁出し更(かわ)り番に陣営を戍る。

十九日、諏訪頼忠の番兵、昌幸の兵と闘ふ。

二十日、岡部長盛・柴田康忠戍兵を出す。昌幸・信幸歩卒中に在り。康忠の陣前を過ぐ。康忠之を急撃す。昌幸の兵敗れ幟を捨てて走る。長盛以為へらく敵と雑蹂（入りまじる）し接戦するは必ず難しと。乃ち河に縁り堤に翳れ敵の後に出でて馳突す。昌幸・信幸騎士を指揮し之を拒ぐ。長盛麾を秉（と）りて進む。敵兵馳せ来、昌幸父子を救ふ。長盛の兵杉山總藏・千野十介等八九輩力戦し之を破る。城兵数十人を斬り首級を獲る。信幸猶ほ進み闘はんと欲するも昌幸之を止め兵を引き去る。此の後昌幸父子屢出で我陣営を窺ふと雖へども敢へて復び近づかず。忠世諸将と議り松平康國（本書書松平源十郎而不名。按ずるに、依田信蕃子源十郎姓名を賜ひ松平修理亮康國と曰ふ。上文十一年に在り）及び弟忠教を天神林に遣はし以て敵に備ふ。諸将堅く陣営を守り敢へて出兵せず。神祖諸将の兵疲るるを聞き大須賀康高・井伊直政・松平周防守康重等（康重周防守康親子。襲称周防守）に命じ五千余騎を率ゐ援兵を為す。軍を収めしめて還る。岡

部長盛首級を浜松に上る。神祖、村上彌右衛門を以て使と為し、長盛及び其臣杉山總蔵等九人に書を賜ひ以て其功を褒む。康高・直政信州に至り上田城を急攻せんと欲す。上杉景勝、関白秀吉の旨を受け大いに援軍を発するを聞き、諸将と議る。丸子に放火し其勢に乗りて退軍す。大久保忠世を小諸城に留め以て昌幸に備ふ。保科正直・諏訪頼忠・大草知久・下條等各其邑に帰り兵を厳め之を防ぐ。年譜・創業記・徳川記・三河物語・家忠日記・松栄紀事

臣按ずるに、真田昌幸、弾正幸隆の子、武藤喜兵衛なり。幼きより武田信玄に事へ戦陣を更歴（次々と経験する）し謀略に長ず。二兄信綱・昌輝長篠に戦死す。故に勝頼之をして本姓に復し以て其衆を統ぜしむ。上田の戦に能く関東の諸将を困ぜしむ。其将略知るべし。参河物語、鳥居元忠の挙動を書くに蜀（幼虫）を虎の如くに畏るる者と過（あやま）つ。諸書之に拠り以て信（まこと）と為す。然れども夫れ元忠百戦の余勇、三方原・諏訪原の軍に創を裹（つつ）み猶ほ戦ふ。膽気益壮なり。伏見城を守る

に及び義烈天下に震ふ。世を挙げ共に知る所なり。一勝一敗は兵家の常なり。始め垂翅谿を回ると雖へども終に能く翼を澠池（澠池会＝中国戦国時代、相手の威勢に屈せず国威をあげた例）に奮ふ。平巖親吉・保科正直の如きも亦畏縮孱（よわい）懦、未だ必ずしも此の如きの甚だしきに至らず。家忠日記、刪略（けずる）し書かず。蓋し見る所あらん。参河物語、大久保忠教の撰する所、其兄忠世を美むるに帰すること多くして愛憎の言無きに不ず。亦猶ほ鄴（地名、春秋の斉の邑。漢代魏の都）侯家伝、李繁の筆より出づるが如し。故に臣今折衷し其の信ず可き者を取り之を書く。其中を得ること庶し。

是月、関白秀吉、佐佐成政浜松に通謀するを聞き、兵を将ゐ越中に至り富山城を攻む。織田信雄焉に従ふ。成政降を乞ひ秀吉之を赦す。成政を挈へ大阪に還る。創業記・秀吉譜・松栄紀事

九月十八日、神祖田原に畋し、十月三日、浜松に還る。創業記曰、九月十五日、自駿府還浜

松。二十五日至吉田。晦至岡崎。拠家忠日記九月十八日。敗于三州田原淹留数日。創業記作十五日還浜松。蓋誤。而年譜・家忠日記並云、十月三日還駿府。亦誤。創業記作浜松為是。彼此各有得失故松栄紀事不係月日。今択其可者従之

神祖諸将を召し質を大阪に送るべきかと試問す。諸将対へて曰はく「今諸州の豪傑先を争ひ質を納む。彼の所為に効(なら)ふべからず」と。神祖雅(もと)より欲せざる所なり。故に終に質を送らず。北條氏直将士二十人を浜松に遣はす。誓書を献じ軍国事に和協せんことを請ふ。神祖亦将佐に命じ、各誓書を送る。家忠日記・松栄紀事

是に先んじ、石川数正岡崎に留守す。小牧の戦、人有りて神祖に告げて曰はく「数正密かに秀吉に通款す」と。神祖其の累代の重臣たるを以て信ぜず。数正、数大阪に使ひし、秀吉之をして神祖に京師に来るを勧めしむ。神祖聴かず。数正以為へらく、神祖終に秀吉に従ふべからず。第三子既に質と為り第二子勝千代、秀康に従ひ共に大阪に在り。往き之に就くに如かずと。松栄紀事○甲陽軍鑑曰、秀吉為以采地八万石給数正。故出奔。併附于此

十一月十三日、数正妻孥を挈(たずさ)へ岡崎を出で大阪に奔る。松平家忠深溝城に在り、之を聞く。岡崎を距つること三里、其夜馬に策し岡崎に馳せ至るも数正既に尾州に至る。家忠先づ新城、七之助の堡に拠りて陣す。参州の士、未だ一人の至る者も有らず。家忠士卒を分配し城門を警衛す。

十四日、酒井忠次馳せ吉田より岡崎に至る。参州の諸将相踵して至る。忠次状を浜松に告ぐ。神祖人心の動揺を恐る。

十六日岡崎に至る。以て之を鎮圧し松平家忠の速やかに至るを賞す。深溝城に還らしめ以て士馬を憩はしむ。始め数正出奔し使を遣はし、松平五左衛門近正に同じく大阪に奔(はし)るを勧む。近正、左近乗正孫、左衛門尉親清子 近正之を却(しりぞ)け使若し再来せば必ず之を殺さんと欲す。数正之を覚り復びは使を遣はさず。時に近正、松平乗勝家に在り。乗勝、乗正子、近正伯父、称源二郎

其日、子新二郎一生と乗勝の家臣二人とを浜松に遣はし其状を告ぐ。一生をして

浜松に留めしめ是に至る。神祖其の忠純を賞して曰はく「近正、叛臣数正に党せず。去年蟹江の役に力戦厲忠す」と。乃ち短刀を一生に賜ひ大給に還らしむ。又書を小田原に遣(遣)はし数正の出奔を北條氏直に告げ、使を小諸城に遣はし大久保忠世を召還す。忠世以為へらく、此の城を棄てて岡崎に帰らば則ち数月の功徒(いたず)らに虚と為らん。聞くに、武田信玄瞽(こ)児有り、海野龍寶と称す。眞田昌幸之を迎へ将と為す。上杉景勝弊に乗じ甲州に入らば則ち土人乱を作す。事為すべからず。当に善く守る者を択び此城に居(きょ)せしむべしと。遍く部下に問ふに敢へて応ふる者無し。弟忠教之を守るを諭す。忠教諾す。忠世喜び岡崎に至る。

是月より明年二月に至り、忠教小諸城を守る。北地深雪にして景勝・昌幸出兵する能はず。忠教戍将を得、番を更(か)はり岡崎に帰る。三河物語・徳川記・家忠日記・松栄紀事　石川数正既に大阪に至る。意(おも)ふに、必ずや秀吉の殊遇を得、厚く恩賚(らい)（たまいもの）を蒙らんと。而るに秀吉之を待(たい)すること甚だ薄し。人或は其門に榜(ぼう)（立て札）し以て其の

旧主に背くを譏る。数正之を羞ぢ門を杜(と)ぢ出でず。年譜附尾・松栄紀事○拠家忠日記・秀吉譜・松栄紀事、十八年秀吉滅北條氏、大封諸侯。以信州松本城授数正時為出雲守。按ずるに、松本、是時深志と称す。下文に注す

十五日、神祖酒井忠次の第に臨み申楽を観る。創業記曰放鷹吉田。按ずるに、吉田城は酒井忠次守る所なり。蓋し放鷹して申楽を観るなり。今年譜に従ふ

十六日、岡崎に至る。

十八日、参州の将士に命じ岡崎城を修繕せしむ。

二十二日、西尾城に如(ゆ)く。

二十七日、岡崎に還る。年譜曰、二十三日、狩参州。今従創業記・家忠日記 関白秀吉、既に南海北陸を定む。天下の将掌握に帰す。唯だ神祖のみ服し難きを憂へ焦心労思す(なやむ)。乃ち織田信雄と議り羽柴勝雅・織田信益・土方雄久を召し諭旨す。家忠日記無信益。今従創業記・松栄紀事 和議を為さしめて曰はく「石川数正来奔す。彼必ず不平なら

ん。汝曹（おまえたち）善く之に処せよ」と。

二十八日、勝雅・信益・雄久岡崎に至り神祖に謁し秀吉の意を聞陳（開）す。信雄も亦三使に就き神祖に京師に入るを勧む。神祖曰はく「長湫の戦に、吾斬る所の獲（くび）皆有名の士なり。秀吉当に憤を吾に洩らすべし。軽には京師に入るべからず。儻（も）し大軍を以て来攻せば則ち吾蒸笹（じょうち）を折るのみ（容易につぶす）。卿等復びは来説く勿れ」と。三使語無くして退き、相議りて曰はく「直ちに此言を報さば則ち必ず関白の怒に逢はん。然れども事既に重大なり。其実を以て告げざるべからず」と。遂に其の言を以て帰り報ず。秀吉怒らずして之に頷く。（創業記・家忠日記・秀吉譜・松栄紀事）石川数正亡げ去るに召（及カ）。参州城主多く質を浜松に納む。本多康重第二子二郎八紀貞（後為備前守）を納む。神祖之を嘉して曰はく「汝の家世忠貞に篤く絶へて携貳（そむき離れる）の心無し。何ぞ質を用ゐ為さん」と。乃ち紀貞を祖父廣孝に送り還す。数正の部曲八十騎を内藤家長に隷（つけ）る。本多重次、数正の所為を悪（にく）み計を以て大阪

に質する所の長子仙千代を取り、岡崎に来さしむ。松栄紀事　城中伝へ称す、秀吉将に参州を攻めんとすと。神祖諸将を召し問ふ。「孰（たれ）か能く岡崎を守るべき者なる」と。本多正信対へて曰はく「手づから妻子を刃し城を枕にして死する者可なり」と。神祖乃ち精兵数百騎を本多重次に給ひ岡崎城を守らしむ。仙千代を更へ丹下と称し曰ひ、書を賜ひ重次の武功を褒む。松栄紀事

十二月三日、信州深志城主小笠原貞慶、保科正直守る所の高遠城を攻む。正直之を撃破し多く首級を獲る。貞慶敗走す。按ずるに、貞慶叛服常ならず。十五年帰順し後復びは叛せざる事小笠原家譜に詳し。又按ずるに、深志城今の松本城なり。貞慶復び□業、其称を更ふ　神祖之を褒め書及び包永刀を正直に賜ふ。創業記曰、正直不及一戦。今従家忠日記・松栄紀事　神祖信州に出師せんと欲す。本多重次諫めて曰はく「請ふ、臣等の首を斬り然る後に発兵せよ」と。神祖乃ち止む。年譜附尾

九日、西尾に狩す。

十八日、岡崎に至る。

十九日、駿府に還る。

二十八日、神祖右近衛大将に兼ね右馬寮御監と為る。　年譜○本書作左馬寮拠家忠日記・松栄紀事。十五年十二月為左馬寮御監。左蓋右字詭。故今訂之

是月、本多重次に采邑五十貫を、酒井忠次に一千五百貫を、榊原康政・本多忠勝・大久保忠鄰に各一千貫を、鳥井新太郎忠政（元忠子）に三百貫の地を加給す。　年譜附尾

是歳、青山藤七郎忠成を以て世子長麻呂の傳と為す。　忠成喜大夫忠門子。後為常陸介更播磨守○松栄紀事曰、以忠成及内藤彌三郎為傅。家忠日記無彌三郎。今従之。按ずるに、台徳公主たりて世子と為る、諸書明文無し。今置傳に拠り世子と書く（守り役を置くことにより「正式のあとつぎ」と書く）。下之に倣ふ　浅井半兵衛・鴨田権右衛門・瀧六蔵抱負（お守）の臣と為る。　家忠日記・松栄紀事　従三位平信雄、正三位に叙せられ権大納言と為る。　公卿補任。無月日。書左中将如故豈下歴参議中納言而任大納言乎。未詳

十四年丙戌正月十日、神祖岡崎に如く。創業記。按ずるに、本書、後浜松に還ると書きて日せず（事の年月日を書かないこと）

十九日、吉良に狩す。関白秀吉羽柴勝雅をして神祖に京師に来るを勧めしむ。時に神祖吉良に在り。勝雅に謂ひて曰はく「吾何の故に京に入りて膝を屈せん」と。勝雅旅寓に帰り其の便を伺ふ。神祖日に遊猟を事として勝雅の言ふ所耳聞かざるが如し。既にして勝雅謁を請ふ。神祖出で之を見て曰はく「汝未だ去らざるか。何ぞ其の言の周諄（しゅうじゅん）（くどい）たるや。吾甚だ聴くに厭く。汝須らく早く帰るべし」と。勝雅曰はく「今使し再び至りて公従はず。関白必ず大いに怒る。大衆を率ゐて来伐せん。吾来国中を見るに城墨未だ修せず、唯だ放鷹を好むのみ。亦危ふからずや」と。神祖勃然（けいぜん）として曰はく「汝何をか言ふ。秀吉兵多しと雖へども十万に過ぐべからず。吾兵寡と雖へども能く地理を諳（し）り、之を険隘に迎へて之を邀撃（ようげき）せば則ち摧枯拉朽（さいこらうきゅう）（容易に打ちくだく）の如きのみ。吾豈に之を憂へんや。汝復びは言ふ

勿かれ。若し又此に来たらば首領保つべからず」と。勝雅大阪に還り秀吉に告ぐ。

松栄紀事以此一節為去年勝雅・信益・雄久使于浜松時事。今従家忠日記・秀吉譜

秀吉又怒らず。徐(おもむろ)に曰はく「彼言ふ所是を良しとす。吾之を熟思し彼をして京師に来さしむるのみ」と。其夜、既に闌(たけなわ)、秀吉急に勝雅及び織田信雄を召し出で二人を見謂ひて曰はく「吾、之を得たり」と。二人驚き其故を問ふ。秀吉曰はく「吾、吾妹を以て之に妻はす。嫁娶既に成る。彼必ず此に来ん。若し猶ほ遅疑(ちぎ)(ためらう)せば則ち太夫人を以て質と為さん。彼曷為(なん)すれぞ此に来ざらん。天下を安んずるの策なり」と。二人善しと称す。即ち冨田知信をして勝雅に副へ又浜松に使せしむ。

二十一日、勝雅・知信吉田に至り先づ酒井忠次に告げ其状を以て、即ち忠次と吉良に往き謁を請ふ。神祖曰はく「吾既に之を絶つ。何為(なん)すれぞ復び来る。吾不(しか)らざるのみ」と。忠次請ひて曰はく「彼嘉礼を以て来謁す。願はくは之に見えよ」と。神祖已むを得ず之を召す。勝雅・知信、秀吉の意を以て告ぐ。神祖曰はく「吾

夙に秀吉に怨無し。彼婚嫁を以て和を乞ふ。吾豈に之を拒まんや」と。二人悦び大阪に帰り之を告ぐ。秀吉大いに喜ぶ。　年譜・創業記・家忠日記・秀吉譜・松栄紀事　北條氏政、神祖と秀吉との和を聞き意甚だ平ならず。　創業記

二十七日、秀吉、信雄を岡崎に遣はし和親を謝す。神祖浜松より岡崎に至り之に礼接す。信雄留まること二日、清洲に還る。神祖既に秀吉と講和す。北條氏政の変有るを慮る。

二月二十六日、岡崎を発し駿府に至る。　創業記・家忠日記・松栄紀事

三月九日、氏政と三島に会ふ。

十一日、又黄瀬川に会ふ。　創業記・松栄紀事一説十一日会于沼津。酒井系図云、会于總河原。蓋黄瀬川上也。紀事正文作黄瀬川。今従之　其儀甚だ厳かなり、氏政、鷹・馬及び刀を上る。神祖、虎豹皮・猩猩皮・縐（ちりめん）及び名刀・南蛮鳥銃を氏政に、国俊刀・吉光短刀を氏直に贈る。酒酣（たけなわ）にして酒井忠次起ち舞ふ。歓を極めて罷む。　松栄紀事

二十一日、神祖浜松に還る。　創業記・家忠日記・松栄紀事

四月二十三日、本多忠勝を以て大阪に納采せしむ　松栄紀事曰、神祖以天野康景納采。秀吉不悦曰、家□重臣酒井左衛門尉・榊原小平太・本多平八郎等有焉。当遣一人来天野三郎兵衛者吾不知也。信雄聞之。遣土方雄久於浜松告之。神祖憤欲絶婚。雄久頻請曰、如此則信雄大失秀吉之心。願遣重臣一人以成其事。神祖許之。乃遣忠勝。附備一説　秀吉喜び忠勝を享(もてな)し貞宗の短刀・定家の墨蹟を賜ふ。　家忠日記・松栄紀事

五月朔、松平豊前守康俊卒す。　久松系図康俊神祖異父弟

五日、忠勝浜松に還る。秀吉其の妹朝日姫を以て神祖に嫁す。浅野長政輿を護る。冨田知信・伊東太郎左衛門・滝川儀大夫詮益　左近将監一益弟　・織田長益・羽柴勝雅・飯田半兵衛等焉(これ)に従ふ。婢妾(めしつかい)従者百五十余人。途中観る者堵(と)(土塀)の如し。酒井家次・松平家忠・内藤信成・三宅康貞等浜松に出で之を迎ふ。

十一日、家次輿を参州西野に迎ふ。

十四日、浅野長政輿を榊原康政の第に寓す。即日浜松城に入る。浅野長政、秀吉

の命を致して曰はく「吾一妹有り。嫁し以て箕帚の妾（人妻＝謙遜語）と為す」と。酒井重忠輿を接く。合巹（さかずき）の礼成る。将士参賀す。

二十六日、神祖榊原康政を大阪に遣はし礼成るを告ぐ。康政先に冨田知信の第に至る。秀吉来。康政を労ひて曰はく「吾、子に見えんと欲すること久し。故に登城を待たずして来たり。往年小牧の役、子、檄を諸軍に馳せ吾を毀り其醜詆（恥をかかせそしる）を極む。当時之を見甚だ怒る。子の首を厚く購ふと下令し以て甘心せんと欲す。今家□卿と講和す。宿憾（以前からのうらみ）頓散（おさまる）す。子、忠を其君に尽す。固より吾の欲する所なり」と。康政拝謝す。

翌日、康政登城す。秀吉之を厚遇す。既にして康政浜松に還る。　創業記・家忠日記・秀吉譜・年譜附尾・松栄紀事　神祖兵を発し真田昌幸を討たんと欲す。

七月十七日、駿府に至る。

八月七日、秀吉使を遣はし神祖に謂ひて曰はく「昌幸既に我に属す。請ふ、其罪

を赦し伐つ勿かれ」と。神祖之に従ひ竟に出師せず。

二十日、神祖浜松に還る。（創業記・家忠日記・又栄紀事）是に先んじ、神祖将士をして駿府城を修繕せしむ。是に至り功竣す。

九月十一日、権に焉に徙居す（移りすむ）。群臣拝賀の礼畢る。浜松に還る。

二十四日、岡崎に如く。秀吉数使を遣はし神祖の来謁を請ふ。神祖将佐を集め之を議る。酒井忠次曰はく「秀吉の心信じ難し。其信ずべきに及び京師に入るは未だ晩からざるなり」と。諸将皆然りと曰ふ。故に止む。或は伝ふ、秀吉、神祖の来ざるを怒り将に秀康を殺さんとすと。神祖之を聞き曰はく「吾秀康を以て質と為すに不ず。之を子として養はる。彼若し其義子を殺さば則ち曲彼に在り。吾何ぞ焉に与からん。古より婚姻を結ぶと雖へども讎敵と為る者多し。吾豈に彼を畏れ輒ち京師に入らんや」と。秀吉之を聞く。

二十六日、浅野長政・津田隼人正・冨田知信・織田長益・羽柴勝雅・土方雄久を

以て使と為し、所生の大政所を岡崎に送り、以て質と為さんと欲し、京師に入るを請ふ。神祖之を許す。長政等帰り報じ、秀吉喜び事既に定まる。羽柴美濃守秀長諫めて曰はく（秀長、秀吉弟。至従二位大納言領大和。世称大和大納言）「大夫人を以て敵国に質すること、武将の恥、孰れか大なる。彼若し命を拒まば則ち一戦を決するに如かず」と。秀吉哂（わら）ひて曰はく「汝が心隘し。汝等の知る所に非ざるなり」と。聴かず。

二十七日、神祖浜松に還る。井伊直政・本多忠勝・榊原康政の親族一人を京師に遣はし以て質と為す。秀吉の志に由るなり。（創業記・家忠日記・秀吉譜・年譜附尾・松栄紀事）

十月四日、神祖権中納言と為る。（公卿補任・家忠日記・秀吉譜・松栄紀事）将に京師に往かんとす。諸将皆謂ふ「秀吉天下を三分し其の二を有す。何の憚る所有りて其の所生を以て質と為さんや。真偽未だ量るべからざるなり」と。神祖曰はく「吾も亦疑無きに非ず。然れども彼善意を以て来過（ママ）す。吾之を信ぜずして京師に往かざらば

則ち彼を畏るるに似る。縦(たと)ひ詭計有りとも吾其誠を竭(つく)さん」と。誰か敢へて之を議らん。遂に大久保忠世・井伊直政を以て留守と為す。

十三日、浜松を発し京師に如く。本多忠勝・榊原康政・酒井忠次・阿部正勝・永井直勝・鳥居元忠（秀吉譜作左京亮忠政。今従家忠日記・松栄紀事）・奥平信昌・西尾隠岐守吉次・牧野讃岐守康成等焉に従ふ。（西尾小左衛門任隠岐守。牧野右馬允更称讃岐守）十五日、岡崎城に至り大政所の来るを待つ。

十八日、松平家忠池鯉鮒駅に大政所を迎へ輿を護り岡崎城に入る。時に大政所を知る者無く、人其詐を疑ふ。神祖浜松より夫人羽柴氏を迎へ岡崎城に入る。之をして会晤(かいご)（対面）せしめ群疑尽く散る。（創業記・家忠日記・秀吉譜・年譜附尾・松栄紀事）

二十日、神祖岡崎城を発す。大政所を城中に質として留め、井伊直政・本多重次之を護衛す。重次薪柴を屋旁に積む。若し不諱(き)（さけられないこと）有らば則ち大政所を燔き殺さんと欲し予め其備を為す。秀吉、神祖の上途するを聞き、館駅を修し

治具を設く。日に数万の従者を饗し供張（宴のため幕を張り設備する）すること甚だ盛んなり。　松栄紀事曰、二十五日、神祖至京師。秀吉至旅寓労之還大阪。然諸書所不載。附以備攷

二十六日、神祖大阪に至り美濃守秀長の第に入る。秀吉即ち来、神祖の手を握り歓笑す。秀長をして之を饗せしめ其の精豊を極む。　秀吉譜曰、時有開雨戸者。関東築室不設雨戸。従者聞其声。疑有変而驚頗夫（失）色。冨田知信来弁之。従者乃安。按ずるに、十年。甲州平原宮内の変、土屋権右衛門雨戸を闔づ。則ち関東已に雨戸有り。家忠日記・松栄紀事皆載せざる所なり。故に今取らず

二十七日、神祖大阪城に登る。秀吉之を庭に迎へ礼接甚だ恭し。尾張大納言信雄も亦同じく至る。　家忠日記・松栄紀事書内大臣。拠公卿補任、信雄明年十一月方為内大臣。蓋二書追書之也。今訂之　神祖信雄に譲るも信雄辞す。秀吉自ら神祖の手を執り先行せしむ。従者皆秀吉の命に従ひて入室す。秀吉の臣入るを得ず。秀吉、神祖と殿守に登る。奇琛（ちん）宝貨、委積盈前（あふれるほど財宝が積みあがっている）。饗畢り千宗易をして点茶せしむ。　宗易、号利休居士。当時以茶知名

十一月四日、秀吉、白雲茶壷・正宗短刀・三好卿の刀を神祖に贈る。宅地を聚楽郭内に相し、秀長に命じ高門大廈（か（＝家））を造らしむ。藤堂與右衛門高虎、之を監る。源介虎高子。初事秀吉公。後帰神祖。為元勲任佐渡守。更和泉守領伊賀。至従四位下左近衛少将 又神祖侍臣の宅地を授く。本多忠勝・榊原康政等を召し長湫の軍事を談ず。忠勝に謂ひて曰はく「我素（もと）汝が勇名を聞く。長湫の役寡兵を以て我大軍に抗し終に屈撓せず。苟しくも勇猛出群の者に非ずは此の如きこと能はず」と。忠勝終に矜色（ほこるさま）無し。家忠日記・秀吉譜・年譜附尾・松栄紀事

五日、神祖正二位に進む。

九日、本多忠勝中務大輔と為り、榊原康政式部大輔と為り従五位下に竝（なら）び叙せらる。

十一日、神祖岡崎に還る。世子浜松に出で之を迎ふ。五州の将士悉く之を來賀す。

十二日、井伊直政をして大政所を護送し大阪に還さしむ。秀吉出で直政に見（まみ）え之

を享(もてな)す。石川数正をして接伴せしむ。直政其不義を疾(にく)み竟日（一日中）一語も交さず。衆に抗言して曰はく「彼累代の主に背き大阪に出奔す。所謂人面獣心の者なり」と。聞く者皆数正の恥知らずを笑ひて直政の気度魁岸(かいがん)（おおきくがっちりしている）たるに服す。家忠日記・秀吉譜・松栄紀事

二十日、神祖浜松に至る。創業記

十二月四日、神祖浜松より徙(うつ)り駿府城に居す。上州(ママ)本府と定め為す（駿府を自分の支配の中心とした）。土岐定政に命じ浜松を警衛せしむ。創業記曰、明年二月徙駿府。考異曰、是年九月。今従家忠日記・年譜附尾・松栄紀事

十九日、関白秀吉太政大臣と為り姓を豊臣朝臣と更ふ。公卿補任、・秀吉譜・松栄紀事○按ずるに、秀吉公の出自寒微なり。元姓氏無し。平姓を自称す。内大臣に任ぜらるるに及び藤原姓を称す。故に公卿補任其の実に従ひて平秀吉・藤原秀吉と書く。是に至り豊臣姓を創製し之を賜ふ

是歳、神祖、内藤紀伊守信正を以て大番頭と為す。信正、三左衛門信成嫡子。時十九歳　大

須賀康高請ふに女壻阿部左馬助忠吉を以て横須賀に居せしめよと。之を聴く。家忠日記。忠吉伊豫守正勝子

十五年丁亥正月七日、小笠原貞慶・真田昌幸帰款し駿府に来、神祖に謁す。関白秀吉に謁するを請ひ、神祖之を許す。酒井忠次をして大阪に送至せしむ。家忠日記・松栄紀事

二月五日、駿府第二城を経営し松平家忠をして之を監しむ。

三月十八日、酒井忠次大阪より還る。家忠日記

是月、関白秀吉自ら大軍を将ゐ島津修理大夫義久を撃つ。陸奥守貴久子。領大隅・薩摩・日向三州。剃髪叙三位法印　参河守秀康焉（これ）に従ふ。

四月、神祖本多廣孝を以て使と為し秀吉を労ふ。時に秀吉、豊後・筑前の界巌石城を攻む。秀吉譜・松栄紀事是復作豊前。今従家忠日記　廣孝善戦し功有り。秀吉之を賞し金鐔（たん）（刀のつば）短刀・羊皮胴服を授く。創業記・家忠日記・秀吉譜・年譜附尾・松栄紀事

五月二十三日、松平備後守清善卒す。年八十三。家忠日記

是月、島津義久の勢日に窮蹙す。僧服を被り龍伯と号し降を乞ふ。秀吉之を許す。

参河守秀康、長岡忠興・池田三左衛門輝政勝入第二子領備前。叙従四位下至参議・蒲生氏郷等と兵を将ゐ日向の諸城を撃つ。望風帰降、九州悉く平らぐ。

七月十四日、秀吉大阪に還る。

十七日、神祖大阪に如き秀吉の九州を平定するを賀す。

八月八日、神祖権大納言と為り従二位に進む。創業記・公卿補任・家忠日記・松栄紀事

十七日、駿府に還る。

九月十九日、神祖田原に狩す。

晦、秀吉奏請し水野忠重を以て従五位下に叙し和泉守と為す。創業記・家忠日記・秀吉譜・松栄紀事

是月、関白秀吉大阪より徙り聚楽城に居す。秀吉譜・松栄紀事

十月三日、神祖駿府に還る。創業記

十一月十五日、酒井忠次の第に臨み申楽を観る。　創業記・家忠日記・松栄紀事

閏月、本因坊を駿府に召す。神祖囲碁を好み、本因坊国手（囲碁の名人）たる故に之を召す。　創業記

十九日、権大納言平信雄内大臣と為る。　松（公）卿補任

十二月九日、神祖西尾に放鷹す。

十九日駿府に還る。　創業記

二十八日、左近衛大将左馬寮御監に転ず。　創業記・公卿補任・家忠日記・松栄紀事

是歳、松平源一郎、首服を神祖の前に於て加へられ諱字を賜ひ命名して家乗と曰ふ。時に年十三　家乗、左近将監直乗子。後襲称和泉守　青山忠成と力士二十五人とを給ひ久能衆と号す。　家忠日記

十六年戊子正月十二日、神祖左近衛大将を辞す。

十三日、前征夷大将軍源義昭落髪し昌山と号す。　公卿補任

二十九日、神祖中泉に狩す。　松栄紀事係二月。今従家忠日記

二月五日、駿府に還る。　家忠日記　関白秀吉、後陽成帝聚楽第に行幸するを奏請す。

故に神祖京師に如く。

三月朔、駿府を発つ。

十八日京師に入る。

四月三日、秀吉点茶の名器数品　博多臺・芋頭水差・小壷・小島（烏カ）天目・羽節茶杓　及び糧三千嚢（のう）（＝俵）を神祖に贈る。　年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事　秀吉奏請し参河守秀康を以て左近衛権少将と為す。兵部少輔井伊直政・兵部大輔大澤基宿を侍従と為す。右兵衛大輔酒井忠世・相模守大久保忠鄰・主計頭平巖親吉・左京亮鳥居忠政・豊後守本多廣孝・讃岐守牧野康成・内膳正岡部長盛・大膳亮菅沼定利並び従五位下に叙す。　家忠日記・松栄紀事書酒井家次亦叙従五位下。按ずるに、家次の叙位任官は下文十一月晦に在り。又按ずるに、松栄紀事左馬助・内藤政長従五位下に叙せらると。家忠日記に拠れば政長の叙任、明年三月に在り。今並び取らず

十四日、車駕聚楽第に幸し淹留すること五日。公卿百官悉く従ふ。内大臣平信雄・権大納言藤原光宣（烏丸大納言元康卿子）・藤原輝資（日野大納言晴光卿子）・源敦通（久我大納言通賢卿子）・神祖・豊臣秀長・中納言豊臣秀次・参議宇喜多秀家（和泉守直家子領備前。至従三位権中納言、世称備前中納言。宇喜多或作浮田。非）・関白秀吉鳳輦の後に扈従し、少将前田利家・侍従織田信包（族属住于永禄十一年。太閤記・松栄記事作信兼。誤）少将羽柴秀勝（信長公第四子。秀吉公養為子。至正三位権中納言。利家・秀勝近衛少将。左右無所考定）・徳川秀康等二十七人皆騎して従ふ。

其の式一（いっ）に永享九年（西暦一四三七年）室町に行幸するの儀に遵（したが）ふ。

十五日、秀吉、左衛門督豊臣秀秋（木下肥後守家定第五子。秀吉公之甥。小早川左衛門督隆景子養之。襲封筑前食四十九万石。至従三位権中納言。世称筑前中納言。又称金吾中納言）を使とし、神祖及び秀次・秀家・利家に命じ誓書を上らしむ。其の余信包等諸州の城主二十一人皆誓書を上る。

十六日、和歌会に一（いっ）に勅ありて信雄・神祖・秀長・秀次・秀家清華（上級公卿家）の上

に班す。　秀吉譜・松栄記事

十八日、車駕にて宮に還る。

二十七日、神祖駿府に還る。　年譜・創業記・家忠日記・松栄記事　秀吉行幸に託し天下の諸侯を聚楽に会せしむ。誓書を徴し以て己に貳（ふたごころあら）不ざらしむ。此れ其の本謀なり。　秀吉譜　神祖、松平家忠をして駿府殿守を経管せしむ。

五月十二日、落成す。使を家忠に遣はし之を褒む。　家忠日記・松栄紀事　秀吉、冨田知信・津田隼人正を小田原に遣はし北條氏直を諭して曰はく「今天下の諸侯一人として京師に朝せざるもの有る無し。而るに氏政父子数州の兵を坐擁し未だ嘗て来朝せず。其の意如何（いかん）」と。

閏月、氏政使を駿府に遣はし秀吉と講和するを乞ふ。

六月、大政所疾す。

二十三日、神祖及び大人京師に如き之に候ふ。

八月、北條氏政、其の弟美濃守氏規を以て使と為し駿府に来たらしむ。

十五日、神祖、榊原康政・成瀬藤八郎をして氏規に副へ京師に往かしむ。氏規、秀吉に白して曰はく「氏直当に明年を以て来朝すべし。前年家□卿と約する所の上州沼田の地、氏直之を得んと欲す」と。秀吉曰はく「家□・氏直の管内の地、吾の知る所に非ず。他日、当に家臣一人を遣はし其の曲折を告ぐべし」と。氏規拝謝して退く。大政所の疾瘳ゆ（なおる）。

九月十一日、神祖駿府に還る。北條氏政、板見岡江雪を以て京師に使せしむ。板見或作板部。国音相近。按ずるに、十八年、北條氏滅す。秀吉公、江雪の才を愛し板見の二字を去り岡氏と称す。以て近習の臣と為す。後神祖に事ふ。今麾下有する所の岡氏は其の後なり又沼田を得んと秀吉に請ひて曰はく「氏直当に明年冬を以て来朝すべし」と。秀吉曰はく「氏直父子関東に横行す。京師に来朝すとも罪誅を容さず。然れども其の徳川家の姻戚たるを以て之を赦し問はず。今其の辞を遷就し（口実を設け）以て歳月を延ぶ。明年入朝せば則ち当に

沼田を授くべし」と。江雪喜び小田原に還る。

十一月二十二日、神祖岡崎に如く。

十二月二十一日、吉良に畋す。秀吉鷹を神祖に贈る。

二十四日、岡崎に還る。

是歳、奥平信昌の第二子初めて神祖に謁し其の外孫たるを以て松平氏及び諱字を賜ふ。家治と命名し従五位下に叙せられ右京大夫と為る。時に十歳。家忠日記・奥平系図○家忠日記、此下連書。世子賜信昌第四子忠明姓名。今不取。説見文禄元年土屋宗藏忠直駿州に流寓すること七年。神祖、其の父昌恒、武田勝頼に事へ忠を尽くすを以て召し麾下に隷せしむ。家忠日記○本書曰、使越後少将忠輝卿慈母朝覺院、養忠直為子。按ずるに、忠直、後に民部少輔と称す又小笠原信嶺をして酒井忠次の第一子小平次信之を養ひ子と為さしむ。家忠日記、信之後称小笠原左衛門佐是に先んじ秀吉、肥後を佐佐成政に授く。成政の政令苛酷なり。土人多く叛す。秀吉召して之を貴（責カ）む。成政摂州尼崎に至り自殺す。時の人以

為へらく、成政往年神祖及び織田信雄に勧め秀吉を滅せんと謀る。故に秀吉之を銜(ふく)む。遂に罹禍に至ると。創業記・秀吉譜

十七年己丑正月二十九日、神祖中泉に狩す。

二月四日、駿府に還る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

五日、駿遠二州、地大いに震ひ民屋多く倒る。家忠日記・松栄紀事

十三日、真田信幸駿府に来神祖に謁す。

二十八日、神祖京師に如く。

三月七日、京師に至る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

十五日、内藤政長従五位下に叙せられ左馬助と為る。家忠日記

五月十九日、世子所生の西郷氏卒す。駿州龍泉寺に葬り寶台院と号す。

二十七日、関白秀吉の側室浅井氏鶴松麻呂を生む。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事、浅井氏備前守長政女。称淀殿。創業記曰、鶴松麻呂称八幡大郎

六月四日、神祖大阪に如き之を賀す。　年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

五日、秀吉蓄ふる所の金銀を親王・公卿・諸侯大夫に分け贈る。各差有り。黄金二百枚・白金二千枚を神祖に贈る。世に之を配金と謂ふ。　秀吉譜曰、黄金二千両、銀一万両。今従年譜・家忠日記・松栄紀事

六日、神祖大阪を発す。

十日、駿府に還る。　年譜・家忠日記・松栄紀事

二十三日、横須賀城主大須賀五郎左衛門康高卒す。　家忠日記・徳川歴代・松栄紀事　神祖康高の外孫榊原忠政を以て嗣と為し其の衆を統領せしむ。　鵞峯文集・榊原忠次碑。忠政、康政長子。此後書大須賀忠政。及賜松平氏、書松平忠政　是に先んじ、秀吉大仏殿を東山に造る。工を鳩(あつ)め之を議る。棟を求むるも諸州に之無し。人を富士山に遣はし之を覓(もと)めしむ。工曰はく「之有り」と。秀吉使を神祖に遣はし之を採り大阪に運び至す。

七月、神祖参遠駿甲信五州の諸将に命じ役丁を差(つか)はし之を挽(ひ)かしむ。一木の費、

黄金一千両なり。歴ること数年其の功方(まさ)に竣す。　秀吉譜係十四年。蓋其事始于十四年。故終言之。今従家忠日記・松栄紀事　秀吉、富田知信・津田隼人正を以て使と為し真田昌幸を諭し、沼田の地を北條氏直に予（＝与）ふ。

二十一日、二使駿府に至り之に苦(告カ)しむ。神祖榊原康政を以て二使に副へ沼田に至り之を諭す。昌幸命を奉(う)け城を避け、之を氏直に致す。

一(二)十六日、神祖、井伊直政の第に臨み申楽を観る。　年譜・家忠日記・松栄紀事

八月二十七日、大宮に往き棟材を富士山に採るを観る。

九月二十六日、甲信二州の役丁をして東郡城を修築せしむ。鳥居元忠白金・綿・漆を献ず。

十月、参遠駿三州の役丁棟材を挽き海浜に至す。　家忠日記・松栄紀事　北條氏直沼田城を得、叔父氏邦をして之に居せしむ。沼田の側近に真田昌幸の所管那久留美城有り。氏邦の部将猪俣能登、之を併せんと欲す。

十一月三日、兵を発し急襲して之を取る。事京師に聞こゆ。関白秀吉平ならず。初め氏直沼田を得ば則ち必ず入朝せんと約す。而るに終に来ず。故に秀吉怒を積み北條氏を撃たんと謀る。氏政父子大いに懼れ石巻左馬允を京師に遣はし其の事を分疏す（言いわけする）。秀吉聴かず。左馬允を執り小田原に送還す。氏政父子に移書し其の憑険負固（小田原の攻めにくいのをたよりにする）朝廷を軽蔑し、食言背約し（言ったことを実行せず）京師に来ざるを責む。

二十九日、神祖京師に如く。年譜・創業記・家忠日記・秀吉譜・松栄紀事

晦、小笠原摂津守康元卒す。酒井家次従五位下に叙せられ宮内大輔と為る。家忠日記・諸士伝略

十二月九日、神祖京師に至り秀吉に謁す。北條氏を撃つを議る。秀吉五畿・山陽・南海・東海・北陸五道に下令し兵を発す。将に明年を以て東征せんとす。長束大蔵大輔正家をして漕輓（運搬手段）を督せしむ。神祖酒井家次をして参遠駿甲信五州

の諸将を以て東征の前鋒と為さしむ。

十二日、神祖京師を発す。

二十二日、駿府に還る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

（　巻之五　終　の記述なし　）